

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

On Stilt Houses in China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 周, 達生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004360

中国の高床式住居

——その分布・儀礼に関する研究ノート——

周 達 生*

On Stilt Houses in China

ZHOU Dasheng [Chou Ta-sheng]**

The purpose of this paper is two fold: (1) to demonstrate the distribution of stilt houses by ethnic group; and (2) to compare the ceremonies during and after house construction among these ethnic groups. In the concluding section, the author discusses why this architectural form continues in use until the present.

- | | |
|----------------|---------------|
| I. はじめに | III. 分布の地域と民族 |
| II. これまでの研究の概略 | IV. 儀礼をめぐって |
| 1. 中国以外の地域の場合 | V. まとめ |
| 2. 中国の場合 | |

I. はじめに

日本の民家の源流を探る場合、日本の内在的要素も無視できないが、日本の地理的位置からみて、周辺地域、つまり、中国大陸、朝鮮半島、北アジア、東南アジア、オセアニアの諸地域の影響という、外来的要素も考えてよいだろう。とすれば、日本と周辺地域との比較検討は、たいへん重要になってくる。

日本と周辺地域の民家の比較検討で、本稿で問題にする高床式住居（杭上住居）に

* 国立民族学博物館第1研究部

** The author's name is Romanized according to the Pingin system [Romanization in the Wede system is given in brackets].

については、従来、個別小地域の断片的とりあつかいが多く、広域を包括する比較研究が少なかった。

ところが、1960年代以降、東南アジア全域の民家を体系的に概観し、比較研究を試みた報告が、後述するように現われる。また、オセアニアに関しても、同種の報告が現われるようになった。国立民族学博物館の特別研究の一つである「日本民族文化の源流の比較研究」は、総合的シンポジウムを毎年開催しており、1982年度はその第4回目として、「すまい」をテーマにとりあげ、1983年1月19日から22日までシンポジウムを行なった。その結果は、杉本尚次編『日本のすまいの源流——日本基層文化の探究』として、すでに刊行されている[杉本 1984]。そのシンポジウムにおいては、日本の周辺地域として、東南アジア、オセアニアだけでなく、中国大陆や朝鮮半島、北アジアも含めて討論された。その際、中国の高床式住居については、田中 淡と筆者が触れることになったが、田中は「中国住宅の類型」[田中 1984: 343-370]の中でそれをとりあげ、筆者はそれに対するコメントとして、「巨視的にみた中国の民家」[周 1984a: 371-381]の中で、大局的に高床式住居に触れただけである。そのため、本稿において、中国大陆の高床式住居をより詳しく論じようと考えた次第である。

中国の高床式住居についてのこれまでの調査研究は、たいへん少なく、そのため文献資料もたいへん乏しい。筆者は、1973年以来、ほぼ毎年中国で調査を行ってきた。その調査は、必ずしも民家に限定される調査ではなかった。また、民家に主体を置いた調査であっても、たとえば、高床式住居の立柱から棟上げといったような建築の過程、あるいは、棟上げ式のような儀式的過程を観察することは、その機会に恵まれることは容易でなく、偶然性に左右される。したがって、収集できた資料は、充分なものであるとはいえない。

ところが、たとえば、雲南省西双版纳タイ族自治州の1978年訪問時では、水道が高床式住居に引かれていなかったし、1980年の訪問時でも同様であったのに、1982年の訪問時では、一部にすぎないが、高床式住居のバルコニーのそばに水道を備えるものが出現していた。もちろん、各村には、従来同様、屋根付きのりっぱな井戸があり、それもそのまま利用されているのであるが、今日すでに上記の変化が現われているのである。また、高床式住居各部の接合は、たとえば、従来なら杓と杓穴を組み合わせたかたちで、釘を用いることはなかったが、今日では、釘をも用いる場合があり、そのため、従来のより大型化した住居も出現するようになった。しかしながら、変容の芽生えがあるといえども、総体的にはまだ伝統的様相のままであるといえよう。したがって、調査は、状況にさほど変化が起こらないうちに行なわなくてはならず、何年

も先に延ばしてよいというわけにはいかなくなる。だが、ここ数年中に完べきな調査を終了させることは、きわめて困難であるといえよう。その調査を可能な限り実現させることを期待しつつも、現有の不完全資料を、この際一応それなりにまとめておく必要もあらうかと思われる。

という次第であるので、不完全を承知のうえ、ここ数年来の調査資料と、断片的といえども一応収集された乏しい文献資料とでもって、中国における高床式住居の分布、その儀礼などについて、ここに述べることにした。それは、とうてい日本の民家の源流を論じるところには至らないが、将来の比較検討のための基礎的資料になろうかと思われる。なお、分布、儀礼などについて述べる前に、簡単ながら、これまでの高床式住居についての研究の概略を、中国以外の場合と、中国の場合とに分けて述べておく。それによって、今述べた不完全資料を一応まとめておくことの意義が、少なからず解していただけることと思われる。

Ⅱ. これまでの研究の概略

1. 中国以外の地域の場合

高床式住居を含めて、東南アジア、およびオセアニアなどにおける各種の居住様式もしくは民家について、広域を包括する比較研究がすでにいくつも現われている。そのうちのめばしいもので、参考になるのは、以下のものを挙げ得るだろう [岩田 1962, 1985], [田邊 1970], [杉本 1971, 1977, 1984, 1985], [太田 1984]。

ところで、太田邦夫の世界の木造構法の分布などをあつかった論文 [太田 1983]によっても紹介されているヨハネス・レーマンは、東南アジア、オセアニアのみならず、中国地域まで含む、世界の杭上建築分布図を作成している [LEHMANN 1904]。太田は、その分布図に対し、19世紀の状況を伝える資料としては、信頼性が高いと評しており、太田が再掲載するにあたっては、ただトルコ内陸部とアムール川流域のギリヤークの二例を、その後判明した事例として追加したという。しかし、その分布図は、ヨハネス・レーマン自身が断わっているように、実際に調査して作成したのではなく、可能な限りの当時の研究資料、旅行者の手記や写真などに基づいて作成されたのである。したがって、太田の述べるように、東南アジアやオセアニアなどについては、信頼性が高いかも知れないけれども、中国地域の高床式住居の分布は、巨視的には信頼がおけても、細かい点をうかがうわけにはいかない。したがって、レーマンについては、ここに指摘した点にとどめ、次の「中国の場合」の項では、問題にしない

ことにする。

2. 中国の場合

中尾佐助の照葉樹林文化論は、雲南省やアッサムあたりを、照葉樹林文化のセンターだと想定している。しかし、中尾は、最近になってこそ雲南へも調査に入っている[中尾 1984], [梅棹・中尾 1985] が、それまでは、西南中国に足を踏み入れていなかった。したがって、それまでの著書[中尾 1978]では、「華中、華南の奥地の常民の住居がどんなものかは、私は見たこともなく、その研究報告は非常に稀である。」とし、ただ一つ少しばかりまとまった報告に、アメリカ人のスペンサーによる報告[SPENCER 1947]があると述べている。その後の論文[中尾 1979]でも、中国に関する資料は、やはりスペンサーによっている。

中尾は、その著書[中尾 1978]で、スペンサーはきわめて面白い観察をしているとして、「彼によると華中の揚子江中流地域、湖南省、江西省の地域に杭上家屋がかなりあって、さらに華南地域、華南沿岸部に点々と杭上家屋が見られることを指摘している。このスペンサーの観察を抛りどころにすると、日本家屋の杭上構造は、タイなどの東南アジアのものより、華中地区の杭上家屋に直接連帯するとみる方が自然であろう。こうしてみると日本家屋の構造の要素はすべて華中の照葉樹林帯にそろって存在しており、日本家屋がその系統に属することは簡単に結論づけてもよいだろう。」そして、「タイ族はもともと華南地区に住んでいた民族で、インドシナ半島を南下し、13世紀にやっとタイ北部でスコタイ王国を建てたという歴史がある。このようにタイ族は華南地区からいわば極めて新しい時代にタイに移動してきた民族である。したがってタイ族の文化の多くの部分は、華南の故地にいたころのものが保存されているとみてよいだろう。今も華南に残るタイ族は^{チワン}壮族自治区として多くの人口をもっている。その人達の住居様式はといわれれば、それは私には目下のところわからないのだ。」とも指摘している。引用部には、たとえば「華南に残るタイ族は^{チワン}壮族自治区」なら、「華南に残るタイ系民族は広西チワン族自治区」としたほうがよいと思われる表現があるけれども、まだ西南中国や華南に行かなかった段階で、中尾は卓見というべき意見を述べているのである。

中尾は、すでに雲南を調査したと述べたが、その調査地は昆明から大理、麗江方面で、筆者も1984年にその方面を調査したことがあるが、高床式住居の観察されるところではない。では、高床式住居の観察される地域を、実際に歩き、調査した人々の場合は、どのように述べているであろうか。

まず、伊東忠太である[伊東 1982a]が、伊東は「支那建築研究の方法に二方面ある。第一は文献の研究であり、第二は遺跡の調査である。」と述べているが、実際は「予が支那建築研究の経歴に関して略述することを許され度い。予は既往に於いて前後六回支那に出遊した。第一回は北京を中心として其の附近を調査し、第二回は北京より程を起し、直隸、山西、河南、陝西、四川、湖北、湖南、貴州、雲南を経て緬甸に入った。第三回は……」というように、かなりのフィールド・ワークを行なっているのである。そして、「湖南の辺境に於いて原始的家屋を見たが、それは我が国の所謂天地根元宮造に比すべきもので、全然木材を以て造られ、屋根は茅を以て葺かれてゐたのである。」と述べている。そこで、その1902年から1903年にわたる西南中国や華南を歩いた「支那旅行談、其の四」と「其の五」の部分[伊東 1982b]を見てみると、筆者も一部歩いたことのある四川、湖南、貴州、雲南の紀行が書かれている。しかし、そこには、たとえば貴州の鎮遠府では「建築物には見るべきものが無いようであるから」とか、貴州の施秉県や黄平州では「此の附近多くの苗人を見た。」とか述べるのみで、ミャオ（苗）族の高床式住居などには、まったく関心を示していない。ただ、ビルマ（緬甸）に至って、やっとシャンの建築の項で、「農民の小屋は実に面白いものである。……日本古代の神社宮室の建築と如何にもよく似ている。植物一式の材料所謂大社造型の平面、柱本位で横羽目の壁板、棟持柱、横から昇る階段、深い軒先、草葺の屋根、其の他種々彼我類似の点を発見する。これ等は偶然の符合か或は何か互に関係のある事か、研究すべき問題である。」と驚きを示すだけである。

島居龍蔵も、伊東忠太とはほぼ同じ時代の1902年から1903年に、中国西南部で少数民族の調査を行なった[島居 1980]。島居の調査は、今日から見れば、たとえばプイ族をミャオ族に含めてしまっているとか、訂正すべき点もあるが、先駆者としての評判は高い。高床式住居に関する方面では、「施平県義倉と名づくる倉庫がある。名は義倉であるけれども、今は米を貯蔵しているとも見えず、すこぶる荒れはてていた。その建築は床少し高く、ちょうど日本の田舎によく見るところの神社の建物に似て、正面に入り口あり、壁無くして全く木造である。日本の昔の建築法はこれらと関係が無いかとも思われた。」というような指摘もあるが、おおむねは「家屋の状態は、その規模ははなはだ狭小であって、日本の田舎に間々見えるところの貧家の如く、かつ極めて不潔である。」といった類いの記述ばかりである。

藤島亥治郎の場合[藤島 1942]は、少々異なる。藤島は、「私の常に稱へる建築の人文地理学的見方をここに取り上げようといふのである。」と述べるだけあって、その第四章は「民族の建築表現」となっており、その一節に「苗族の建築表現（南支系山

岳地帯の風土的表現)」がある。当時としては、卓越したねらいでもって書かれているのであるけれども、ミャオ族の分布する西南中国や華南あたりの現地経験がなかったからか、今日の参考にはなりがたい。

次は、もっと新しい資料を見ることにしよう。

若林弘子は、鳥越憲三郎の編する書物において、「倭族の高床式住居」その他〔若林1983: 82-142〕で、高床式住居に論及している。鳥越は、日本人と祖先を同じくし、文化的特性を共有する人びとを「倭族」の名のもとにとらえ、「倭族」がもと雲南の高原盆地に発祥したとする新説を述べている。筆者は、「倭族」論に与しているわけではないので、ここではそれについて触れることは望まない。ところで、若林の表題にもこの「倭族」が付いているが、実際には、アカ・カレン・ラワ・ラフ・リス・ハニ・ルー・メオ・ヤオ・漢、というように、諸民族名でその住居が問題にされているので、「倭族」は気にしないですむ。

若林は、ハニ、ルーの2民族については、雲南ハニ族、雲南ルー族もしくは雲南省シーサンパンナのルー族としている部分もある。タイでアカ族とするのは、中国のハニ族と同一民族で、ルー族としているのは、タイ・ルーのことで、タイ族の一支系であり、中国雲南省西双版纳のほとんどのタイ族（中国ではタイ王国のタイ族と区別するため、タイのを「泰族」、中国のを「傣族」と表記する）のことである。ラフ族は、中国の雲南省にも分布するが、若林は、どこのラフ族かを断わっていない。若林たちの調査地が、主としてタイの山岳地帯であるので、このラフ族は、タイのそれであろう¹⁾。

次は、ラワ族。これは、中国側のワ族に相当するが、ラワと称しているので、タイの話にまちがいない。カレン族は、検討するまでもない。リス族は、中国でもリス族と称する。西双版纳には、地方政府機関に勤務する者があっても、きわめて少数。そ

1) 鳥越[1982]によれば、雲南の西双版纳に若林と同行したのは、直江広治を団長とする日本民俗学者友好訪中団(1980年)に参加して、広西チワン族自治区訪問のあとの訪問であるという。とすれば、ごく短期の訪問であるようだ。とうてい雲南のラフ族の集居する地域まで、観察してきたとは思われない。しかし、鳥越は、「アカ族の本宗である雲南のハニ(哈尼)族は、タイのアカ族と衣服において共通していた。ところが雲南のラフ(拉祜)族は中国服の影響をうけていたのに対し、タイのラフ族は古形を伝えていた。また住居家屋もタイの少数民族と同じように、雲南でも母屋と露台とから成る高床式建物であった。」としている。ここで雲南のラフ族と述べているのは、単にタイ族の集居する地域にも住む、少数のラフ族の観察だろうと思われるし、後半は、ラフ族の住居でなく、タイ族やハニ族の住居の話であろうが、前半とのつながりがあるようにもとれる。ラフ族は、中国でも漢族や彝族などと混住するラフ族は、土間式(地床式)住居に住むが、ラフ族の集居する地域では、高床式住居がある。したがって、あいまいな表現には、引っかかる次第である。それはともかく、若林のラフ族住居の写真と図を見る限り、高床式のものであり、若林のラフ族住居のほうはやはりタイのラフ族のものなのであろう。

んな場合は、伝統的住居でなく、機関のアパートに住んでいるので、若林のリス族は、タイのそれである。なお、タイのメオとヤオの2民族であるが、ヤオは中国でもヤオ族で、メオは中国ではミャオ族である。若林は、メオ、ヤオの2民族とも土間式住居であることを述べているし、中国でも、ミャオ族、ヤオ族は土間式住居が顕著であるが、後述するように、中国では、ヤオ族のごく一部にも高床式住居があり、ミャオ族の高床式住居の分布は一層広い。

若林の資料については、以上のように多少の整理をしておいたほうが、資料の価値を損わないですむだろう。上記のように疑問点があったけれども、それはわずかで、大半はたいへんすぐれたレポートであり、特に建築学的には参照すべきところが多々あるのである。整理してみてもわかったのは、ハニ族、タイ族だけが、中国の高床式住居の直接資料であって、ラフ族やラワ族のは、中国の高床式住居に関しては、間接資料になろうということだ。したがって、若林の資料は、本項より、前項であつかったほうがよかったかとも思われるが、一応本項であつかうことにした。

では、以下においては、中国人による研究をとりあげたい。

解放後の最近になってこそ、民族学、考古学、建築学などの研究者による研究資料がある程度出現することになったが、散発的報告にすぎず、また簡単にすぎるきらいがないでもない。それでも、それらを利用せざるを得なく、以下でそうさせていただくけれども、本項では、便宜上、解放以前のものと、解放後のごく一部のものだけをとりあげる。解放後の他の資料は、例外もあるが、ほとんどは簡単な記述のものであり、それらは以下の各章で、随時引用して検討の材料に供したい。

まず、驚くべき資料であるのは、解放以前といっても、その前夜の1948年の戴裔煊の資料である。すでに数回述べてきたように、今日でも高床式住居に関する報告は、多くはないだけでなく、あっても簡単にすぎるのがほとんどであるというのに、この資料は、『干蘭——西南中国原始住宅的研究——』と題するもので、「干蘭」すなわち高床式住居を問題にした专著であって、しかも全文80ページに達するものであるからだ。

戴は、史料に現われる「干蘭」、「干欄」、「閣蘭」、「高欄」、「搗欄」、「麻欄」などの高床式住居を意味することばは、すべて西南中国のいくつかの少数民族語からの漢語音訳だと分析している[戴 1948]。また、長江流域以南には、古くは高床式住居があったはずだと推論し、それは漢族の中原よりの南下にしたがって、その地域の漢化が進行し、現在痕跡が見られないけれども、いずれ考古学上の発掘によって、そのことが実証できるだろう、というふうにもいっている。われわれは、のちに浙江省の河姆

渡遺跡の発掘や、その他の新発見によって、そのことが卓越した仮説であったことを知ることができる。

考古学者の安志敏も、似たところがある。これは、もう解放後のことになるが、安は、漢代の随葬に用いた明器の高床式建築模型の各地からの発見に基づき、長江流域とその南部に、およそ新石器時代の晩期から、高床式住居が出現しているだろう、とした[安 1963]。これも、河姆渡遺跡の発掘²⁾によって、その推論の正しさが証明されたのは、いうまでもない。興味ぶかいのは、安は、その論文で、今述べたことが考古学的に証明されたとしても、それによって世界各地の高床式住居が、すべて長江流域とその南部から伝播していったということを説明するには至らないとし、この居住形式は、自然条件とも関係があって、たとえば湿潤なところで、竹や木に恵まれていたら、勢いそれが出現する可能性があるからだ、という意味のことを述べている箇所である。この意見の当否は別として、興味ぶかいというのは、従来の中国人は、学者であろうとも、文化の来源をできる限り外来のものだと考えたくない傾向があり、今日またそうであるにもかかわらず、高床式住居が、中国を中心として伝播していったと考える必要はない、としており、それがきわめて珍しい発言になるからだ。

ところで、田中 淡が、中国の木造建築における架構形式の類型について、比較的に新しい時代のものも含めて論評したのは、いわゆる「檣梁式」(「量梁式」ともいう)と「穿闔式」(「立貼式」ともいう)のちがいについて触れ、今日の華南や西南中国の「干闔式」つまり高床式住居や「吊脚楼」(懸造)のすべてではないが、それらの多くは「穿闔式」のほうの類型に属すると述べ、日本の建築も「穿闔式」の影響を少なからず受けている印象があるとしたものである[田中 1983]。

ちなみに、「檣梁式」は、柱上に梁を重ね、「瓜柱」と称する束を梁上に載せ、さらにその上に他の梁を重ね、それをくり返して、数本の柱と梁による木架構の単位を作り、平行する2組の木架構の間に、横方向の「枋」という桁をわたして、柱と柱の上

2) 河姆渡遺跡の発掘報告などは、すでに数篇発表されている[浙江省文管会・他 1976]、[浙江省文物管理委員会・他 1978]、[楊鴻勳 1980]、[楊鴻勳 1984]。1980年、杭州の浙江省博物館において、1973年に河姆渡遺跡が発見されてから、発掘、出土した高床式建築の遺構にとまなう、大量の木造部材の一部を見ることができた。その後、この展示はなくなったそうだが、部材の継手仕口の枅や枅穴は鋭く工作されたものであって、新石器時代にすでに高度の技術水準に達しているものであったことを示していた。その展示品のそばには、この高床式住居を復元したとすると、それは、広西チワン族自治区の竜順平等公社のトン族の住居とほぼ同じものになると説明のある、トン族の高床式住居の写真があった。

なお、日本でも、河姆渡発掘の木造部材、あるいはその後出土した資料に基づいて、田中 淡が数篇の論文[田中 1980, 1981, 1983]で、中国の伝統的木造建築における高床式住居の位置などについて、論評を加えている。

端をつなぎ、それぞれの「枋」の上に、平行に「櫓」つまり棟木を重ね置き、棟木と直角方向に「椽」つまり垂木を並べるものである。この形式は、すでに先秦時代にあったが、先秦時代は、今と異なり、黄河の中・下流域である中原にも豊富な木材があったので、中原およびそれ以南に分布するものであった。一方、「穿闔式」のほうは、柱と柱をつなぐのに、梁ではなく、「穿」と称する貫を多用し、柱を母屋桁まで立て上げる架構形式のものである。江西省や福建省など、中国南方に多い類型のものである。なお、前者の「擡梁式」のものと、折衷したものもあるが、その場合は、中央の諸間が「擡梁式」で、両側が「穿闔式」になっている。

田中は、さらにこうも述べた。「わたしたちが中国を代表すると考え、ときには漢（民族）式建築とさえ呼ぶこともあるところの、木造建築の伝統は、こうした異なる二つの伝統の混淆の所産である可能性すらある。後者において榫卯・卯眼の技術が早くから発達し、それが後世の中国建築に普遍的な技法となったことなどは、その例証といえるかも知れない。木造建築技術という面からいえば、木材の豊富な江南もしくは南方が、華北・中原の師となることがあったとしても、それはむしろ当然といえるであろう。しかし、こうした混淆、影響の伝播する時期、実態の諸相を知るためには、干闔式建築に属する資料があまりにも限定され、寡少に過ぎるのが実情である。」[田中 1980]、と。

これに対し、再び中国人による資料にもどってその資料を見ると、しばしば、高床式住居の「干闔式」の別称の一つである「竹楼」のほうを用いて、そのことばのかもとす印象だけによってだろうが、少数民族の高床式住居のすべてが、竹もしくは木を縦横に組んで、籐や竹を細くしたので、きつくしばって固定しただけの、シンプルな構造のものと思っているきらいがあり、古い文献に出てくる「巢居」ということばから、樹上家屋とさほど変らない程度のもとも思っているふしがあるのを発見する。したがって、それらのものは、南方の漢族の「穿闔式」民家と同じような架構法をもつ、少数民族の「穿闔式」高床式住居を知らないようである。また、少数民族の「穿闔式」高床式住居もしくは非高床式住居を知る者といえども、それは漢族から採り入れた架構法だと思こんでいるのである。しかし、そういう傾向を、ここではいちいち文献名を挙げて示す煩は、必要ではなからう。

林蔚文の場合は、中国東南地区の越人の建築について、史料を分析した論文を書いている[林 1985]。高床式住居のみをあつかったものではないが、福建省の崇安閩王城の宮殿遺跡に見られる立柱法が、中原の早期のその影響を受けているなど、いくつかの例でもって、古代の東南地区に分布した越人の建築は、依然として多くの自民

族の特色を保留してはいるが、中原文化の影響も受けているのだ、としている。今日の少数民族の一部は、系譜的にこの越人と無関係ではない。そして、少数民族の高床式住居には、多かれ少なかれ、漢族建築からの影響が見られることも確かである。とはいえ、林論文のように、高床式住居に触れても、それ自体の記述をするよりも、中原文化、つまり漢族文化のすぐれた点を少数民族が採用したというのが一般的で、少数民族から漢族が影響を受けた面は、ほとんど留意されていない。

したがって、郭湖生のようにいう場合は、たいへん珍しい³⁾。郭は、55の少数民族のうちの14民族の住宅に触れたが、そのうちいくつかには、高床式住居があった。その高床式住居でミャオ族に触れたところで、次のように述べたことがある。要約になるが、「穿闘式」は、「杉」（日本でいうスギではなく、コウヨウザンのこと）の産地で最も適したもので、ミャオ族のその技術は高く、伐りとった木をほとんどむだなく利用でき、梢の部分は垂木として、その下の中段の部分が柱用、根に近い部分は床板などの板か、貫用部として、さらに樹皮は屋根葺きに用いるといい、大工頭は枅穴を作るのに、あとで楔を必要としないほど、きっちりした寸法で作ることができ、木取りが終わると、木槌だけを用いて組み立てを行なうという。そして、江西、湖南、浙江、四川等省の漢族にも、この種の作り方があがあるが、それは、漢族からミャオ族が学んだのか、ミャオ族から漢族が学んだのかというと、郭はミャオ族から漢族が学んだのだと思う、といていた。このように少数民族からの影響というのは、中国ではたいへん珍しい。

江道元は、1959年から1982年までに、チベットの卡若文化の住居 [江 1982] など、少数民族の実地調査に基づく論文を数篇書いている。それらをまとめて、『中国民族建築学』もしくは『中国少数民族建築学』（仮題）を刊行すると1983年に予告していたが、それには、チベット、イ、チャン、ナシ、ミャオ、トン、タイ、チンポー、ペーの諸民族の住居がとりあげられるはずだった [江道元 1983]。しかし、今日までにその刊行は伝えられていない。

もし、上記表題の本が刊行されたとすると、これもたいへん珍しい例になろう⁴⁾。

3) 郭は、国立民族学博物館の「日本および周辺地域、諸民族住居の比較研究」共同研究会（代表：杉本尚次）において、「中国少数民族の住宅」と題する発表を行なったことがある（1983年10月15日）。郭は、共同研究員ではないが、日本学術振興会による招請で、当時京都大学人文科学研究所に7カ月滞在していたので、共同研究員の田中 淡が、国立民族学博物館の上記研究会で発表するのを依頼したのである。

4) 従来、少数民族の住居が、建築学の本にとりあげられなかったわけではないが、たとえば、劉敦楨編の本 [劉 1980] では、『中国古代建築史』を表題とするもので、その中の一部に少数民族の住居（当代のそれ）があつかわれたのであり、他の建築学書 [中国建築史編写組 1982]、[趙正之 1983: 10-33] などでも、同様に、建築史の中であつかってきたからである。高床式住

Ⅲ. 分布の地域と民族

高床式住居の中国における名称は、既述のように「干闌」、「干蘭」、「干欄」、「閣闌」、「高欄」、「檣欄」、「麻欄」などがあるが、このうちの「干蘭」もしくは「干欄」と「麻欄」が今日でもしばしば用いられている。もっとも、一般的には「干蘭」（「干欄」）で、「麻欄」は、チワン族のそれに用いられている。この外、既述の「竹楼」もしばしば用いられており、「吊脚楼」は、懸造であるとすでに注釈しておいたが、日本では、片高床ともいい、片側を斜面にもたせかけ、他の片側を高床にするものであるが、中国では、「吊脚楼」が懸造（片高床）を指す場合もあり、そうでない普通の高床式住居を指している場合もある。この「吊脚楼」という名称も、今日しばしば用いられている。さらに、「楼房」もしくは「楼居」が、高床式住居を指す名称として用いられていることもしばしばある。この「楼房」（「楼居」）は、一般には平屋の「平房」に対する語で、二階建以上の家屋を指すのであるから、注意が必要だ。

なお、土間部分と高床の居住部分のある、半高床式の住居は、「半边楼」と称している。これら以外にも、個別に造語したと思われる高床式、あるいは半高床式住居の名称が出現することもある。

いずれにしろ、以下で中国の文献を引用する場合に出てくる用語で、一般的なもの

居の「干蘭」が、前記戴裔煊の著書表題で、副題に「西南中国原始住宅」と「原始」あつかいされていたのは、解放後の今日ですら「古代建築」あつかいしているのであるから、むりはないだろう。ちなみに、劉の別著は、田中 淡らによる訳書がある〔劉 1976〕。

ところで、主として中国科学院自然科学史研究所の編集による近刊の本〔中国科学院自然科学史研究所 1985〕も、『中国古代建築技術史』を表題としてはいるが、その第11章は、「少数民族建築技術」が見出しになっており、劉敦楨が、少数民族の住居を、その第7章の「元、明、清時期の建築」中であつかった〔劉 1980〕のに比べ、第11章を執筆した研究者たちの認識のちがいが発見される。

この第11章の部分にあつかわれた少数民族は、前記江道元の刊行しようとした本に収録されるはずであったという民族と、それ以外の民族も含まれているので、そのすべてというわけではないけれども、江道元の予告した本の内容が、この章の一部として、吸収されたのではないかと推察される。もしそうだとすれば、「少数民族の建築学」というような書名の本は、中国では刊行するのがまだ困難であるとする事情が、存在するのも知れない。それはさておき、前記『中国民族建築学』の「民族」であるが、これは「中国民族」なるものがあるわけではないので、「民族」すなわち「少数民族」を意味しているのである。本来なら、たとえば、中国社会科学院民族研究所は、漢族も含めた研究を行なうべきであろうが、中国では民族研究所は、少数民族の研究をする研究所になっているのである。そのへんの事情については、過去に述べたことがある〔周 1982〕ので、ここでは、詳述するのを避けておく。

いずれにしろ、中国科学院自然科学史研究所の刊行したこの本は、近来稀な大部の書物であり、一部にチワン族の「壮族」が、「僮族」というふうに、すでに廃止された名称で用いられている不用意な箇所もあるけれども、解放後の建築に関する研究の集大成されたものであらうと評価され得るもので、高床式住居についても、最も豊富な資料がそこに納められているといふことができる。

をここにまず記しておいた次第である。個別、特殊なものについては、当該箇所において注釈することにする。

次は、高床式住居の分類についてであるが、通し柱が軒桁まで達しており、その途中に床が作られているものなのか、柱とか床束とかを用いて床桁をまず支えておき、床を張り、その桁の上に柱を立て、軒桁を載せるものなのか、屋根は、切妻なのか、寄棟、あるいは入母屋なのか、脚柱の高さは、高いのか、低いのか、その他種々の異なる特徴でもって、分類するのは可能であり、また、そうしたほうがよいのであるけれども、本稿では、そのようにするわけにはいかない。というのは、調査によって直接得た資料だけでなく、高床式住居の分布を概観するためにも、細かい特徴まで記していない文献資料をも、用いなければならないからである。

では、以下において、高床式住居の地域的分布とそれを持っている民族を述べることになるが、高床式住居の今日での分布は、主として西南中国と華南においてであるので、まず、比較的に広域をあつかっている資料[思想戦線編集部(編) 1981]をたたき台にして、検討しながら、それに他の資料を補充していき、整理を試みたい。この資料は、『西南少数民族風俗志』と題するもので、中国の西南地区の少数民族の衣、食、住、婚姻、信仰などを民族別に記したものである。先に記した高床式住居の諸名称が、それぞれまちまちで用いられているところがあり、二次資料を駆使して編集したものであることが明らかだ。通常は、西南中国といえば、雲南、貴州、四川の3省を指すが、たとえば、中国民族学界でたいへん活躍している「西南民族研究学会」が、上記3省とチベット自治区、広西チワン族自治区の2自治区の成員によって構成されている如く、西南を雲南、貴州、四川、チベット、広西の省と自治区にする場合もある。海南島は、広東省に含まれており、華南に属しているが、この資料のミャオ族の部分には、海南島のミャオ族が言及されている。同様に、湘西つまり湖南省西部のミャオ族も言及されているのであるが、湖南は、中南地区に分類されている。という次第で、この資料は、必ずしも表題にある「西南」の、西南中国に限るあつかいにはなっていないが、上記のように、この資料に他の資料を補足させて分布を整理しようとしているので、はみ出しはむしろ歓迎すべきであろう。

この資料は、29民族の住居に触れている。そのうち、チベット、イ、ヤオ、ペー、回、ナシ、チャン、ムーラオ、アチャン、プミ、モンゴル(雲南省通海県の)、メンパ、ロッパの13民族は、高床式以外の住居とされているので、ここに検討する必要はないかも知れないが、大局的には、そうしてさしつかえないとしても、一部には高床式住居をもつものもあるので、その分布も点検しなければならない。

それは、高床式住居といい切ってよいかどうか問題になるものも含まれる。つまり「井幹」式とか「井架」式とか、「木楞房」もしくは「木楞子」と称する、井籠組、校倉造のものであるが、校倉造の住居には、地床式のもあれば、高床式もある。この資料では、高床かどうかは明確でなくても、他の資料で高床とわかるものもある。したがって、上記13民族中のチベット、イ、ヤオ、(ペー)、ナシ、プミ、ロッパの7民族については、あらかじめ補充資料で高床式住居の分布を明らかにしておくほうがよいだろう。

チベット族・ロッパ族・僜人：

江道元の資料[江 1982]によれば、四川省甘孜チベット族自治州の炉霍県のチベット族の「棒殻」と称する「木楞子」、および、チベット自治区の昌都地区の「木楞子」は、高床式の校倉住居である。

また、チベット自治区の珞瑜地区（今日この地区名は廃止されている。珞瑜地区は、今日の林芝地区の一部と重なる）のロッパ族には、高床式住居の「千欄」式建築があるという。ちなみに、その珞瑜地区は、チベット境内にあるが、ヒマラヤの南麓に位置し、雅魯藏布や丹巴などの流域内にあるので、山地には樹林が密にあるのである。さらに江道元は、まだ民族識別が終わっておらず、したがって「なんとか族」とよばずに「なんとか人」とよぶ人々のうちの一つである、僜人も、この珞瑜地区において「千欄」式建築をもつという。

イ 族：

江道元は、四川省のイ族の「掘架」建築というのが、やはり高床式住居であるとしているが、これも校倉のそれであるようだ。しかし、このイ族は、四川省のどここのイ族かは記していないのでわからない。ところで、江道元の別の論文[江 1981]を参照すると、そこには四川省涼山彝族自治州(大涼山)のイ族住居を主に、雲南省の寧蒗彝族自治县のイ族について触れた箇所もあるが、大涼山のほうでも、森林地区では「井幹」式の、イ族が「木羅々」と称する校倉があり、雲南の寧蒗でも、これがあると記すのみで、その校倉の側面図もあるのであるが、なにしろ外観のそれなので、ここでは高床式の校倉なのかどうかさえ不明である。しかし、江道元の2論文を合わせて推察すると、前記四川省の「掘架」建築は、高床式の校倉で、大涼山の一部森林地区がその場所ということになるだろう。ちなみに、大涼山へは、1985年に行ったことがあるが、西昌市から、昭覺県、冕寧県で見た限りでは、ほとんどが高寒山地であり、ソバやエ

ソバクを主に栽培しており、樹木はたいへん少ない所ばかりであった。したがって、そのような所では、校倉住居は、地床式ですら見ることはなかった。なお、雲南省昆明の雲南省博物館の少数民族に関する展示室には、楚雄のイ族の「木羅々」の写真パネルがあったが、1984年に通過したことのある雲南省楚雄イ族自治州といえども、よほどの山奥の、森林がまだ密にある所以外は、その存在はないだろう。さらに広西チワン自治区に関する資料[広西壮族自治区概況編写組(編) 1985]を見ると、イ族の一部に「干欄」式住居があると記しているが、それだけの記述であって、広西のどここのイ族かまではわからない。

ヤオ族：

次はヤオ族。既述のように、ヤオ族の住居は、ほとんどが土間式住居（地床式住居）であるが、一部に高床式住居がある。前記広西の資料には、前記イ族の場合と同様に、単にヤオ族の一部に「干欄」式住居があるとするのみの記述がある。湖南省の資料[江華瑤族自治县概況編写組(編) 1985]では、湖南省江華ヤオ族自治県の「大山区」と称している山地のヤオ族の住居は、「木棚屋」、「半居家」式住居、と「吊楼」式建築の住居の3種であるという。このうちの「吊楼」式と称しているのが、その説明を見ると、いわゆる懸造（片高床）のそれになっているので、高床式住居の部類になるのである。

ペー族：

次はペー族。ペー族に（ ）を付けて記したのは、今日のペー族でも、たとえば雲南省大理ペー族自治州のような、ペー族の集居地から離れた、他地方のペー族には、ひょっとすると高床式住居の存在もあるかも知れないが、前述のように、筆者の調査した大理から麗江ナシ族自治县までの地域、劍川県や鶴慶県を含めてでは、見るものがなく、また、収集された文献によっても、その存在を知ることができなかったのも、一応は現存しないと仮定し、しかし、考古学資料によれば、ペー族、もしくはペー族の祖先が、高床式住居をもっていた、と記すために、（ ）を付けておいたのである。ただ、『白族社会歴史調査』[民族問題五種叢書雲南省編集委員会(編) 1983d]には、山地の「垛木房」として校倉が出ているが、簡単すぎる説明で、『西南少数民族風俗志』（以下『西南……』と略記する）同様高床かどうかは不明であることを、ここに付記しておく。それはさておき、前記安志敏の資料[安 1963]によれば、1957年に発見された、雲南劍川海門口の遺跡は、青銅器時代か金石併用時代の遺跡であり、多くの

木柱（224本）の出土があつて、詳細は略するが、それは「干蘭」式住居の遺物にまちがいないとするものであつた。ただし、原報告（雲南省博物館籌備処：「劍川海門口古文化遺址清理簡報」、『考古通訊』1958年6期，1-4）の報じた、その住居の一部は、川の杭上に、他の一部は、川岸の陸上の杭上に建てられたもので、家屋の5分の4が水上にある、という推論は、地層断面図に基づいて見ると、その堆積は水成層らしくないので、水上居住遺跡と見るのは、早計であつて、論争する余地がある、という。いずれにしろ、現在のペー族居住域には、高床式住居の分布がすでにないようであるが、かつては、劍川県あたりにもあつたということになるのである。

ナシ族：

次は、ナシ族。雲南省麗江ナシ族自治県へは、訪問したことがあると前で述べた。そこで観察されたのは、大理のペー族の「三坊一照壁」とあまり変わらない住居で、朱良文の資料[朱 1984]に詳しい記述がある。ところで、『西南……』が述べるように、古代のナシ族住居は木造架構のものであつたが、明代から、その瓦葺きのものになり、清初から磚木架構で瓦葺きのものとなった「三坊一照壁」が多くなる。ただ、この様子は、盆地平野などでの話で、この資料にも、麗江の山区、つまり山地には、「木楞房」が残っており、麗江ナシ族自治県より北西になる迪慶チベット族自治州に所属する中甸県や、維西県（今日の維西リス族自治県）、あるいは、北東になる寧蒗彝族自治県の永寧区にも、それがあると記している。しかし、その校倉住居に、高床式が含まれているかどうかは不明である。宋兆麟の資料[宋 1964]にも、ナシ族の校倉住居がより詳しく出ているが、これによっても高床のがあるのかどうかは不明である。けれども、江道元の前記資料では、四川と雲南の境界付近のナシ（モソ）族の「木楞子」も、「干欄」式の伝統建築形式を保留するものの一つとして挙げている。ただ、この場合は、高床式のものもあることはわかっても、場所があいまいにしかわからない。四川と雲南の境界付近というのだから、雲南省側では、前記の中甸か、永寧か、あるいはその双方かであり、四川省側では、ナシ族も分布している木里チベット族自治県か、塩源県か、あるいはその双方かであり、また、このすべての所を指しているのかも知れない。いずれにしても、場所は特定できないのである。しかし、中国科学院自然科学史研究所の資料[中国科学院自然科学史研究所(編) 1985]によれば、「現存する校倉は、上階があり、階上に人が住み、階下に家畜を住まわせている、歴史的伝統を依然として保留するものであるが、一部には平屋のものもあつて、その場合は倉庫のみが高床になっている。」とし、平面図も、側面図も入れており、高床部分の

あることを明らかにしているが、図の説明部分には、雲南省永寧のナシ族の校倉だと書いてある。したがって、少なくとも、永寧には、高床式の校倉があることがわかる。

プミ族：

次は、プミ族。『西南……』は、詳しくはないが、「木楞房子」という校倉住宅のあることを記し、雲南省の怒江リス族自治州の蘭坪県、および同省麗江地区の麗江ナシ族自治県の一部プミ族旧地主は、ペー族の「大院瓦房」（「三坊一照壁」のこと）を模倣したと記している。プミ族の分布地は、以上の蘭坪、麗江以外では、同省迪慶チベット族自治州の維西リス族自治県、麗江地区の永勝県と寧蒗彝族自治県、四川省涼山彝族自治州の木里チベット族自治県と塩源县などである。これら分布地を示した資料[国家民委民族問題五種叢書編集委員会中国少数民族編写組 1981]でも、その住居が木架構で、四壁は木を積んだものとあるので、校倉だとわかるが、こちらは、一般にそれは2層になっており、階上に人が住み、階下に家畜を飼うとあるので、プミ族にも高床式の校倉のあることがわかる。

さて、以上でもって、『西南……』のあつかった29民族の住居中、高床式住居以外の住居とされていた13民族の住居のうち、チベット、イ、ヤオ、（ペー）、ナシ、プミ、ロップアの7民族については、それぞれその一部に高床式住居もあることを述べた。

以下においては、『西南……』が、高床式住居のあることを明記している諸民族を、民族別に見ていきながら、他の資料も駆使して、ひきつづき「西南」中国の高床式住居の分布を確認していこう。

ミャオ族・リー族・漢族の客家・水上居民：

まず、ミャオ族についてであるが、『西南……』は、貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州では、平屋と「楼房」があり、ほとんどは「吊脚楼」とであると記している。この「楼房」は2、3層のもので、最上層は低く、人が住まず、食糧などを貯蔵するものというが、この地域には、1980年と1985年に、かなり広域に調査したことがあり、実見しているので、「楼房」は、普通一般にいう「楼房」でなく、高床式住居を指すほうの「楼房」であるといえる。「吊脚楼」は、前記懸造りのものである。いずれも、「杉」⁵⁾木を用いた、「穿闘式」もとり入れたものである。丹寨県などには、2、3層どころか、4、5層の高床式住居もある⁶⁾。

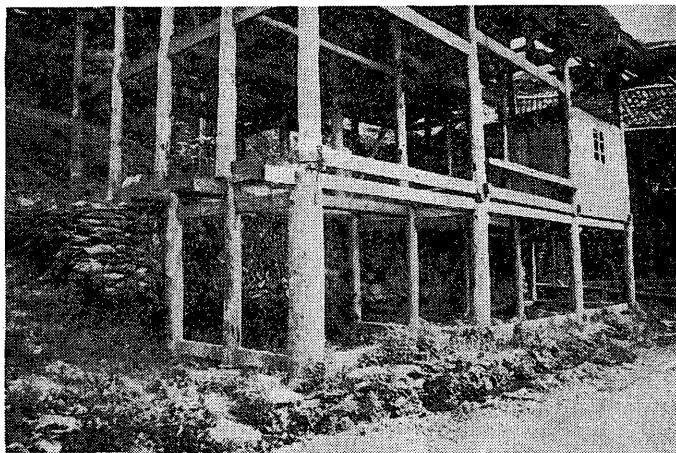


写真1 建築中の「吊脚楼」(懸造)。[貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州
雷山県凱屯寨・ミャオ族]

『西南……』は、湘西(湖南省西部)、松桃(貴州省松桃ミャオ族自治県)、文山(雲南省文山チワン族ミャオ族自治州)、照通(雲南省照通市)、海南島(広東省海南リー族ミャオ族自治州)、川南(四川省南部)、黔西北(貴州省西北部)の住居にも触れて

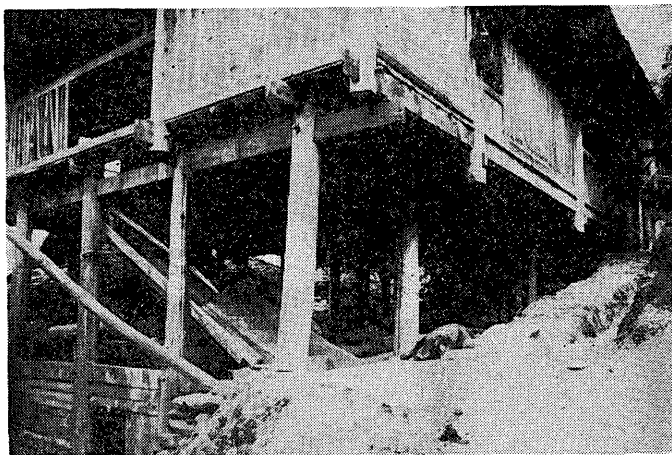


写真2 ほんの一部だけが懸造になっている高床式住居。はしがが高床下の
家畜飼育部より高いところにある。[貴州省黔东南ミャオ族トン族
自治州從江県同樂寨・ミャオ族]

5) 「杉」は、日本では「スギ」と解しがちであるが、*Cunninghamia lanceolata* がその学名で、コウヨウザンのことである。

6) ここでは、分布を問題にしているのので、建築学的特徴の記述は、つまびらかにしないが、建築学的特徴を記した論文はいくつかある [鄧 1981], [李 1983], [石橋大鏡箕寨民俗調査組(編) 1984], [簡 1985], [中国科学院自然科学史研究所(編) 1985]。



写真3 半高床式住居の高床式住居の部分。
【湖南省湘西トゥチャ族ミャオ族自治
州鳳凰県大田寨・ミャオ族】

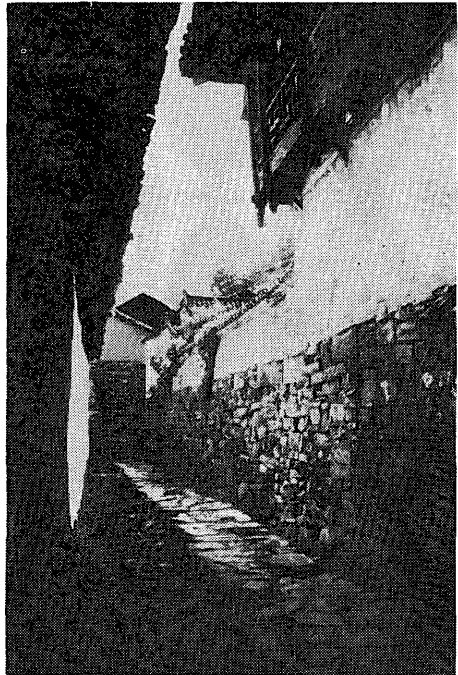


写真4 「3」と同じ（道路側から見た場合）

いるが、そこには高床式住居の記述はない。しかし、湘西、つまり湖南省西部の湘西トゥチャ族ミャオ族自治州へは、1985年に訪れたことがあるが、ほとんどのミャオ族住居は、地床式に変わっているといえども、鳳凰県大田郷大田寨には、ここで「吊脚楼」と称するけれども、懸造のほうではない高床式住居が残っていた。付近に木材が豊富であった昔は、もっと多くの「吊脚楼」があったそうだが、今日すでに少なくなってしまったのである。ちなみに、この高床部分は、家全体でなく、家屋の一部のみが高床になっており、階下の外側には石が積み上げられ、それを囲んでいるので、家屋外からは脚柱が見えず、その部分は一般にいう「楼房」のように見える。したがって、正確には、「高床式」でなく、「半高床式」住居である。なお、湘西といっても、湖南省西部の南端近くの、城歩ミャオ族自治县は、その概況を記す資料【城歩苗族自治县概況编写組(編) 1984】によれば、そのミャオ族の住居は、みな3層の現地で「架寮」と称する高床式住居であるという。

次は、広東省の海南島のミャオ族であるが、このミャオ族は「ミャオ族」とされているが、民族学者のすべてがミャオ族だと認めているわけではない。だから、筆者



写真5 高床式倉庫。[広東省海南リー族ミャオ族自治州保亭県毛岸寨・ミャオ族]

は「民族識別」未完了の集団を表にして、この「ミャオ族」を記入しておいたことがある[周 1982]。それはさておき、海南島のリー族については、スチューベルの『海南島民族誌』[スチューベル 1943]に、典型的高床式住居のあることが記されており、このスチューベルの資料や、その他種々の中国が行なった調査報告を編集して一冊にした「内部資料」[劉 1983(?)]にも、高床式住居があることが記されている。それは、広東省民族研究所の編集した、広東の少数民族に関する資料[広東省民族研究所広東少数民族編写組(編) 1982]でも、俗に「船形屋」と称するといっている、舟型の高床式住居であるが、今日では、山奥にまだ残っている可能性があるけれども、1985年に訪れたことのある保亭県周辺には、すでに残っておらず、ただ、倉庫にその型の高床のものがあるだけであった。ただし、高床倉庫は、脚柱のたいへん短いものである。海南島の「ミャオ族」も、このリー族と同じように、見た限りでは地床式の草葺き住居がほとんどで、一部に地床式瓦葺きの土壁住居があるだけで、高床式住居はなく、やはり倉庫に高床のもあるといった状態であった。いずれにしろ、「ミャオ族」、そして、ついでにリー族について、高床式住居の分布がかつてはあったが、今日は普通には見ることが不可能で、高床倉庫のみが存在することをここに追加しておきたい。

ことのついでに、海南島南端の漢族の高床式住居についても触れておく。前記スチューベルの資料には、崖県(現三亜市)の「町の北縁、海岸の浪打際に、艇家^{タンカ}の①高床家屋が立っている。」として、注の「①」で「艇家は蛋家とも書く事が多い。」としている。ここにいう「艇家」もしくは「蛋家」は、かつては「蛋民」とも称されて、

一種の少数民族だと思われ、漢族から蔑視されたりしたが、解放後は、漢族を構成する人々であって、漢族以外の民族ではないと認定された。ただ、船上で生活する人々なので、「水上居民」ということはあるが、漢族なのである。そして、今日では陸上にもその住居をもつようになっている。それはさておき、今日でもこの「水上居民」の高床式住居があるかどうかは、崖県（現三亜市）を訪れたことのある筆者には観察されなかったが、三亜のリー族住居を調査した浅川滋男〔浅川 1985〕の談話によれば、三亜には、客家の高床式住居がある（スライドの写真もある）。客家は、漢族であるが、その集居地は、広東、福建、江西の三省の接する地域の山がちの所である〔周 1982〕。海南島への移住民は、比較的に新しく、清朝になってからであり、海南リー族ミャオ族自治州の範囲外の、海南島北部よりの儋県、臨高県あたりに多い。いずれにしろ、海南島の客家の一部に、海辺の高床式住居が存在していたのは、興味ぶかい発見である。

さて、ミャオ族は、『西南……』の言及した、貴州、湖南、雲南、四川、広東の諸省だけでなく、湖北省や広西チワン族自治区にも分布する。湖北は知らないが、広西チワン族自治区では、1981年、柳州市から三江トン族自治県へ向かって、途中のところどころでも調査したが、そこのミャオ族にも、大規模の高床式住居があった。三江トン族自治県に近い、やはり広西チワン族自治区内にある、竜勝各族自治県は、調査する予定であったが、都合で行かなかったけれども、竜勝は、トン族、ヤオ族、ミャオ族などが居住するので、各族自治県となっているのであり、伝聞によれば、そこのミャオ族にも高床式住居がある。広西の融水ミャオ族自治県その他にも、ミャオ族の高床式住居はある可能性があるが、まだ確めてはいない。

チワン族：

次は、チワン族。『西南……』は、「チワン族は一般には山地と丘陵地帯に住み、雲南に分布するチワン族は、河谷平野に住む。」と述べ、辺地の山地では「全楼居」、丘陵地帯では「半楼居」、平野部では「地居」とあるといい、その他の説明を加えているが、このあたりの記述は、広西チワン族自治区の高床式住居に触れた、他の論文や資料に基づく説明だと思われるが、中国で最も人口の多い少数民族であるチワン族は、そのほとんどが広西チワン族自治区に分布しており、雲南省、広東省、貴州省、湖南省に分布しているのは少ない。ちなみに、今日では、1300万を突破しているが、1978年の資料〔国家民委民族問題五種叢書編集委員会中国少数民族編写組（編） 1981〕によると、総人口1209万で、広西チワン族自治区に1100数万、雲南省文山チワン族ミャ

チワン族自治州その他の県に82万余、広東省連山チワン族ヤオ族自治県その他に3万5千余、貴州省從江県その他に2万余で、湖南省江華ヤオ族自治県には、4000人余のチワン族が散居している、という。しかしながら『西南……』は、広西のチワン族を収録していないのである。

他の資料[広西壮族自治区概況編写組(編) 1985]でも、『西南……』と同じ三種の住居形式の名を挙げて、簡単に広西チワン族自治区のチワン族住居を説明したのもある。胡仲実の資料[胡 1982]も大差ないが、これには、「全楼居」の分布は、竜勝各族自治县、徳保県、靖西県、竜州県などの広西の北部、西部、南部の辺地の山地にあり、「半楼居」の分布は、宜山県、都安ヤオ族自治県、武鳴県などの丘陵地帯にあり、「地居」式は、その他の平野部にあるとする説明があるのが親切だ。詳しいのは、孫以泰の論文[孫 1963]である。それによると、「全楼居」の「麻欄」は、靖西県のを代表とさせ得る広西の西部、南部にあるものでは、相対的には、原始的な高床式住居であって、木架構であるが、土または小舞竹に泥をぬった壁のもので、後者のように前廊下を設けたりはしないものと、竜勝各族自治县のを代表とさせ得る広西の北部にあるものでは、全木架構で、外壁もほとんどが木材を用いる、より進化した形式の高床式住居であるもの、この二つがあるという。後者には、「望楼」、「偏沙」、「挑楼」(「挑廊」)、「抱厦」などで、前廊下とか底部屋が張りだした、前者より複雑な構造になっている。床下脚柱の周囲には、粗く並べた丸太壁か、頂部までは達しない石積み壁が用いられている。ただし、高床式倉庫のほうは、脚柱の周囲を囲まない。「半楼居」の「麻欄」と称しているものは、前述の「半辺楼」に相当し、土間部分と高床部

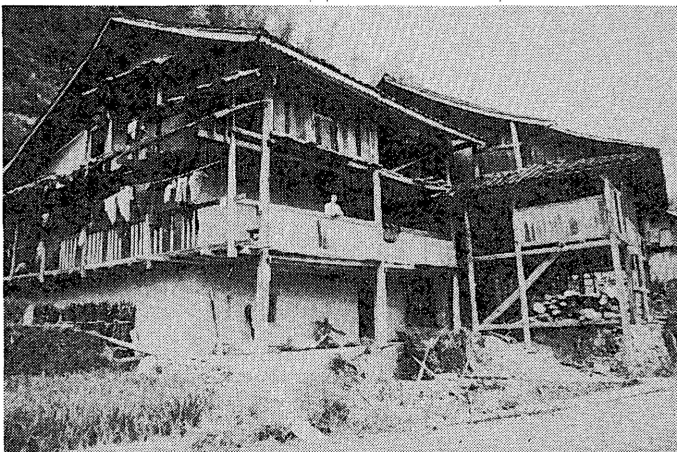


写真6 一部を土壁にした高床式住居。[広西チワン族自治区三江トン族自治県丹洲公社・チワン族]

分かなる住居。こちらは、木材の比較的少ない丘陵地帯に適応したもので、その主な外壁と一部内壁は、土または磚で作られ、高床の部分のほうといえども、階下は低く、一部の空間のみを利用して、他の部分は、土を盛ってしまうので、居住層は、半高床、半土間になり、よって「半楼居」の「麻欄」だとするのであるという。この形式の住居は、木材に欠けるが、地面が比較的急勾配でない環境において建てられるので、種々の雑務を行なったり、物置きとしたりする場所は、屋外にとれるわけであるから、主屋の大きさは、やや小さいという⁷⁾。「地居」式のほうは、土間式とか地床式といわれるものなので、ここでは述べるまでもない。

ところで、武鳴県へは、1978年と1982年に訪れたことがあるが、武鳴県といえども、ほとんどは、水田の広がる平野部であり、筆者の歩いた範囲内では、上記のような丘陵部にあるという「半楼居」の高床式住居は、見ることはできなかった。しかし、広西の三江トン族自治県へ、1981年に調査で行ったときは、そこに住むチワン族にも、高床式住居があったが、これは、もちろん「全楼居」のものである。

プイ族：

次は、プイ族について。

1980年の貴州省訪問では、貴陽市南郊にある花溪周辺で、初めてプイ族の石造住居を見ることがあり、驚いたのであるが、壁面に石を積み、屋根にもスレート状の「水層頁岩」を葺いた民家は、その後の1985年の調査で、貴州省鎮寧プイ族ミャオ族自治州県を訪れると、一層多く出会うことになった。安顺県の場合もそうであったが、なにしろ、珍しいものであるからか、グラビア雑誌や、写真集にも、しばしばプイ族の「石頭寨」（石の村）の写真が収録されている[朱盛良 1984]，[曾・他(編) 1985]，[中国少数民族地区画集叢刊総編集委員会(編) 1985]。

しかし、プイ族は、鎮寧の石頭寨周辺に分布するだけではない。石造の民家は、その材料の得られる地域の特殊な場合であって、本来はむしろ木造のものである。1985年の調査では、貴州省黔南プイ族ミャオ族自治州の都勻市とその周辺も観察したが、そのあたりでは、木造家屋はあっても、高床式住居は、見た限りでは存在しなかった。

『西南……』のプイ族の部分によると、場所は記されていないが、「半辺楼」がプイ族住宅特有のものであるとし、その一半は「楼房」で、他の一半は「平房」，「楼房」は一般に三層になっており、中層に人が住み、下層は家畜小屋、上層は物置きである

7) 前記の形式のものにも、それぞれ図があり、その点文字だけの資料に比べてありがたいのであるが、「半楼居」のほうにも、宜山県と武鳴県のその図が入っている。

という。山地の場合は、木と竹を壁材にすることが普通で、「半辺楼」は傾斜地に建てられ、低い前方が「楼房」、高い後方が「平房」になるが、平坦な所では、一般に「平房」か「楼房」であるという。したがって、プイ族にも、木造の高床式住居があることがわかる。

前記の郭湖生によれば、プイ族の「半辺楼」は、前述のチワン族の丘陵地帯に適応したという「半楼居」の「麻欄」とほぼ同じようで、居住層は、半高床、半土間になっている。そして、配布資料の図と写真には、貴州省羅甸県のプイ族の八総寨と交広寨が記されていたので、存在場所も明らかになった。ちなみに、羅甸県は、貴州省黔南プイ族ミャオ族自治州の先に述べた都匀市より、かなり西南遠くにあり、都匀よりも、広西チワン族自治区との境界のほうに近い位置にあるのである。なお、四川省にもプイ族が3000余人いるが、それは、涼山イ族自治州の寧南県、会東県、木里チベット族自治县と、普格県に分布するものであり、漢族、イ族、リス族などと混居しているという[四川省民族研究所(編) 1982]。しかし、四川のプイ族の住居は、その漢族のものと同じで、ほとんどが「穿闘式」瓦葺きの木架構住居であるというので、高床式住居ではないようである。

トン族：

次はトン族。トン族は、貴州省、湖南省、広西チワン族自治区の2省1自治区の接するあたりに分布しており、貴州省では、黔东南ミャオ族トン族自治州の東部と南部の黎平県、榕江県、從江県、錦屏県、天柱県、鎮遠県、劍河県などに多く、湖南省では、湖南省西部のいわゆる湘西の南半部にある、懷化地区の新晃トン族自治县、通道トン族自治县、会同県、芷江県、邵陽地区の城歩ミャオ族自治县、綏寧県などに、広西チワン族自治区では、柳州地区の三江トン族自治县、桂林地区の竜勝各族自治县などに多い。

筆者は、このうちの三江トン族自治县を1981年に、榕江県、從江県、鎮遠県、新晃トン族自治县、芷江県を1985年に調査した。その経験によって『西南……』のトン族住居の記述を見ると、これはあまりにも簡単すぎる。そこには、トン族の住居を外廊式2、3層の小「楼房」が多く、4、5層の大「高楼」もあるとして、広西の三江一帯には、数棟が連結した大「楼房」があって、庇がつらなっているといい、川岸または傾斜地の村は、「吊脚楼房」であるというのみである。用語のほうの小「楼房」は、背の低い高床式住居、大「高楼」は、規模の大きく背の高いそれ、「吊脚楼房」は、これまでも数回出てきた「吊脚楼」と同じ、ここのは前後関係からわかるように、

懸造のほうを意味している。

ところで、実見したトン族住居は、高床式、懸造、地床式のいずれでも、コウヨウザンの木をふんだんに用いた、「穿闘式」を採り入れたりっぱなものであった。あとで述べる雲南省西双版纳のタイ族の高床式住居も、貫を用いてりっぱに作られているが、トン族のほうは、枘と枘穴がぴったり結合していて、楔を用いていないのに比べ、タイ族のは楔を用いている。したがって、技術的には、トン族のほうがすぐれているといえよう。トン族は、コウヨウザンの植林でも有名で、中国各地が乱伐で禿山同然になり、解放後は植林に励んだといえども、まだ充分樹林が育つところにまでいっていないのに比べ、トン族居住域の人工樹林は、文化大革命の破壊を受けたといっても、よく育っている。

本稿、特にこの章は、高床式住居の分布に重点をおくため、それ以外の建築物に



写真7 庇がつらなっている高床式住居群。
[広西チワン族自治区三江トン族自治県良口公社・トン族]

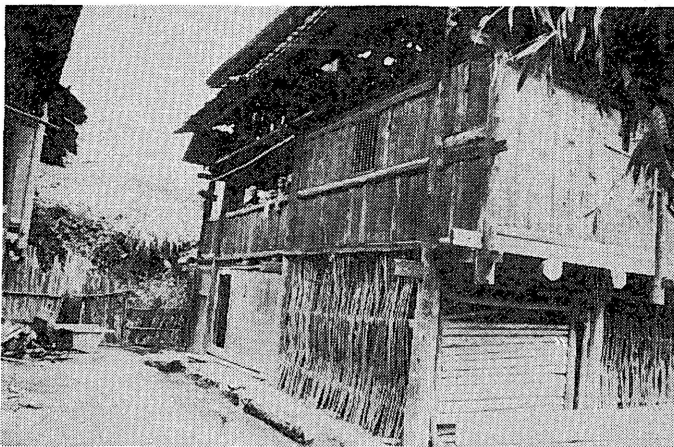


写真8 高床下を囲っている高床式住居。[広西チワン族自治区三江トン族自治県八江公社・トン族]

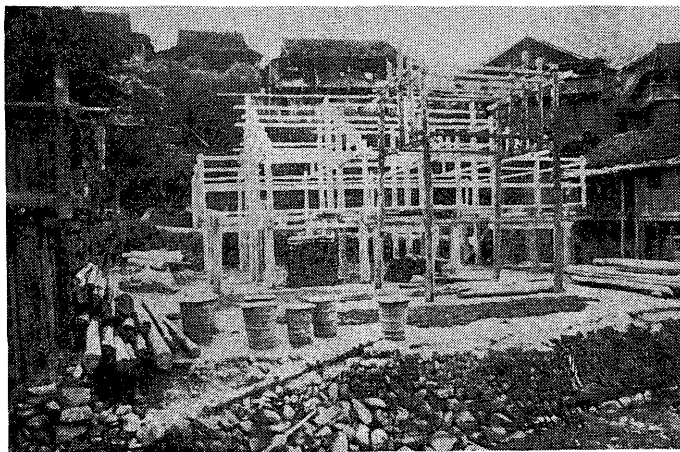


写真9 棟上げ式の終わった未完成の高床式住居と稲穂乾燥用の高床式建物(未完成)。[貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州從江県高増寨・トン族]

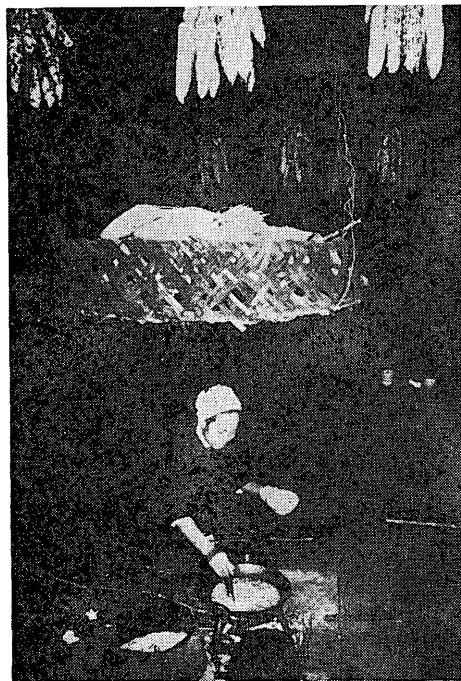


写真10 高床式住居のイロリと火棚。[広西チワン族自治区三江トン族自治県八江公社・トン族]

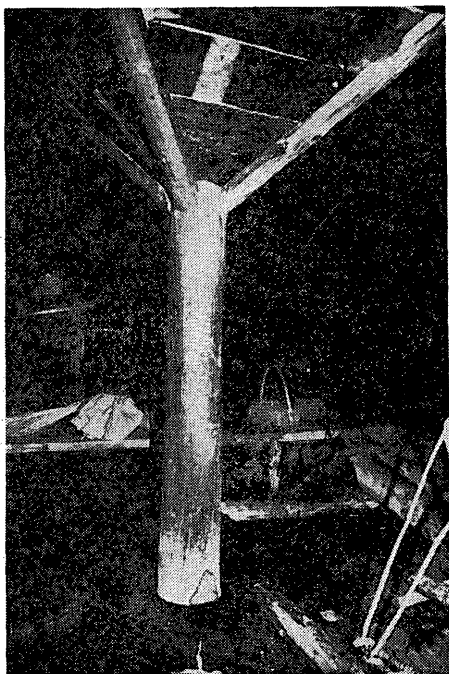


写真11 高床式住居のイロリを床下から支える支柱のしくみ。[広西チワン族自治区三江トン族自治県林溪公社・トン族]

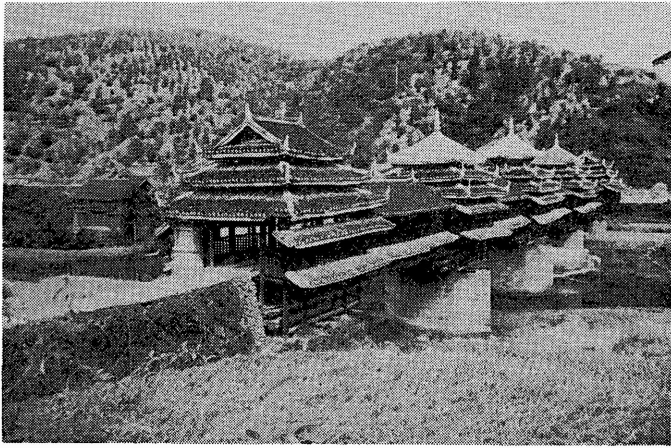


写真12 風雨橋中最も美しいとされている「程陽橋」。〔広西チワン族自治区
三江トン族自治県林溪公社・トン族〕

については、詳細には触れないでおくが、とにかくトン族の建築はすばらしいものである⁸⁾。

さて、トン族の高床式住居についての分布にもどるが、広西チワン族自治区の三江は、そこに住むチワン族にもあることはすでに述べたが、人口の多いトン族（50%以



写真13 峠の上に設けられている涼亭。〔湖南省新晃トン族自治県中寨・トン族〕

8) 「鼓楼」、「風雨橋」（「花橋」）、「涼亭」も、木造建築の優秀さを語るものである。そのすばらしい建築を含めて、トン族の生活文化について詳しいものとして、三江でたいへん世話になった楊通山（トン族）、鄭光松（トゥチャ族）らの編集した資料がある〔楊・他（編）1983〕。さらに、「鼓楼」と「風雨橋」をもっぱらあつかったものがある〔貴州省文管会弁公室・他 1985a, 1985b〕のもの、ここに指摘しておく。



写真14 「開口屋」と称される地床式住居。[湖南省新晃トン族自治県中寨・トン族]

上)の住居は、ほぼすべてが高床式住居であった。ちなみに、1946年に建てられたトン族の旧地主楊徳記の5層の高床式住居は、柱が礎石から床を貫いて軒桁まで達している大木によるものであるが、1980年、解体して、5層を4層に改造し、八江公社(現在は人民公社が郷に改称されたので、八江郷)の公社職員の宿泊所として利用するため、場所を移転させて再建されているが、やはり釘を一本も使わずに、桷と桷穴を結合させるだけで建てられている。竜勝各族自治县は、調査予定を変更して、見ることはなかったが、このトン族も高床式住居であると聞いている。貴州省のほうでは、榕江県、從江県は、高床式住居と懸造りの双方があった。鎮遠県は、地床式住居以外を見ることはなかった。湖南省の新晃トン族自治県は、その県城の竜溪鎮(その後新晃鎮と改称)から40 Kmの中寨郷まで調査したが、観察した限りは、高床式住居も懸造もほとんどなく、すべて特徴のある張り出し軒(「開口」と現地という)のある地床式住居(「開口屋」と現地という)ばかりであった。それは、100本ほどのコウヨウザンを用いて作る、桷の継ぎ手と仕口による「穿闘式」併用の木架構住居である。現地では、懸造のが山奥に少しはあるかも知れないが、もうほとんど残っていないといていたが、自治県概況を記した資料[新晃侗族自治県概況編写組(編) 1985]によれば、中寨郷の住居は、「木結構開口瓦房」と「吊脚楼房」、つまり、木架構「開口」の瓦葺き住居と懸造とが多いとなっていた。しかも、「風雨橋」もあるとなっているが、現地でもいっていたが、「風雨橋」はもうなく、「鼓楼」は南の通道トン族自治県にはあるが、ここには全くないというのである。ただし「涼亭」は、山の峠の所にあるのを、

そこで休んで観察した。なお、新晃から芷江県までの住居も、「開口屋」か、それより構造の簡単な地床式住居ばかりであった。

以上の外、貴州省黔东南ミャオ族トン族自治県の黎平県は、調査で訪れていないが、前記郭湖生の配布した資料の図と写真などによって、高床式住居のあることが確かめられた。

ハニ族：

次は、ハニ族について。

『西南……』は、ハニ族の住居は地方によって形式が異なると断わって、異なるタイプのハニ族住居を説明している。同一民族であっても、地方によって住居形式が異なることはしばしばある。前記トン族の場合もそうであることは、具体的に例を挙げて述べてあるが、一部の人々は、ある民族の一部居住域のみの観察で、その民族の全居住域でもそうであるかのように、断定的に結論を述べていることがある。なにも住居に関するだけでなく、服飾や、食文化についても、その種の独断は、はなはだ多い。

それはさておき、『西南……』は、「土掌房」とか「竹楼」について説明している。名称に少々異なるところがあるけれども、他の資料[哈尼族簡史編写組(編) 1985]にもそれがあるので、後者のほうを参照しよう。それによると、雲南省紅河ハニ族自治州と「内地」(僻地でない所のこと)のハニ族の住居は、かなり牢固で保温性がよい、土木架構の2層の「楼房」だという。この資料の「内地」は、ばくぜんとしているが、『西南……』には、思茅地区の普洱県(今日の普洱ハニ族自治州)とか墨江県(今日の墨江ハニ族自治州)、あるいは玉溪地区の元江県(今日の元江ハニ族自治州)を、紅河と並べて書いてあるので、「内地」の範囲は、このいくつかの、雲南の省都昆明市により近い所を指しているのかも知れない。いずれにしても、この「楼房」は、もちろん高床式住居を指す場合もある「楼房」ではない。ただの2階建以上の住居を指すほうの「楼房」である。それは、石塊でたたんだ基礎を作り、円または方木の支柱を用い、土と磚で壁を作る、外形が正方形または長方形のもので、屋根は平屋根(陸屋根)、切妻、「四斜面」(寄棟か?)のがあり、このうち、「平頂屋」つまり平屋根(陸屋根)のを、現地では「土掌房」というとしている。そして、平屋根のは、「内地」と紅河南岸でかなり普遍的に見られる、土の屋根兼バルコニーであるという。斜面をなすほうの屋根は、草葺きが多く、瓦葺きは少ない、などという。この高床式住居でないものに対し、雲南省西双版纳タイ族自治州や、瀾滄ラフ族自

治県などのハニ族は、竹木架構の「干欄」であるが、タイ族のそれより簡陋な作りで、ハニ族はこれを「捌戈」(漢字音訳なのでヨンコーに近いのが原音であろう)というとし、その床上居住部分は、通常2間に区切り、男女がそれぞれ分かれて居住する、などという。

この資料も、『西南……』も、西双版纳のどこかを明記していないが、高床式住居のある西双版纳のハニ族居住地は、1978年は雨季で登ることができなかったが、1980年の乾季は車で、1982年の乾季は徒歩で訪問したことがある西双版纳タイ族自治州内の勐海県にある、南糯山一帯のことであろう。その半坡老寨や半坡新寨という村のハニ族の高床式住居は、西双版纳各地のタイ族のそれと大差はないが、千木がタイ族のよりかなり目立つもので、男女別部屋のそれぞれに寝床とイロリのあるものであった。

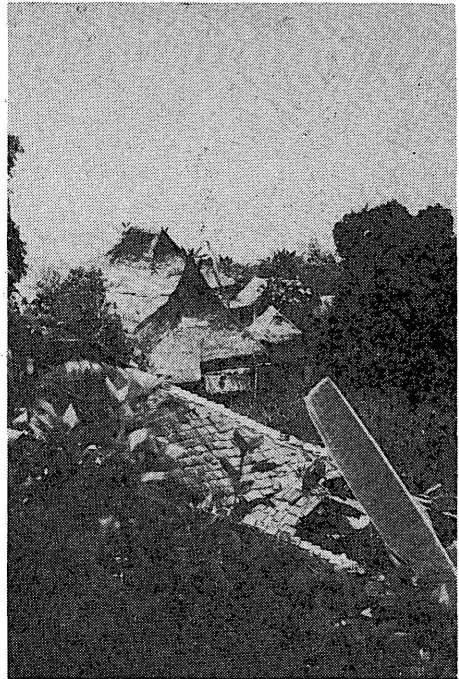


写真15. ハニ族の村と高床式住居。[雲南省西双版纳タイ族自治州勐海県半坡老寨・ハニ族]

プラン族：

次は、プラン族の高床式住居について。『西南……』は、「竹楼」で、4壁は竹を編んで作ること多く、草葺きで床上に人が住むなど、ごく簡単に記すのみである。場所も全くわからない。筆者が、1980年の調査時に訪れたのは、雲南省西双版纳タイ族自治州の州都のある景洪県(州都としていうときには、允景洪と称することもある)の範囲内にある、景洪公社(人民公社は目下なくなり、郷に改称されている。以下いちいち断わらない)所属の曼達大隊の曼布小隊を構成している、曼布山にあるプラン族の村だった。プラン族が集居しているのは、勐海県の布朗山その他であるので、当時57戸、327人の小村だけの訪問で、一般化することは危険であるけれども、そのプラン族の高床式住居は、周辺低地のタイ族のものと大差はなかった。壁も竹編みのそればかりでなく、タイ族同様の板壁のもあったが、タイ族のほうの屋根は、草葺きもあ



写真16 プラン族の村人と高床式住居。[雲南省西双版纳タイ族自治州景洪県曼布山・プラン族]

るが、少なく、裏棧の付いた特殊な薄瓦を葺いたものが多いのに比べ、草葺きの多いのが目立つとか、床上のイロリが、タイ族のは、トン族のそれより見劣りするといえども、プラン族のは、タイ族のより見劣りするといふほどのものであるとか、細かい点で異なるところがあるのみであった。

なお、文献によれば[布朗族簡史編写組(編) 1984]、雲南省思茅地区、臨滄地区、保山地区のプラン族住居は、高床式でなく、土木架構の平屋であるという。

タイ族：

次は、タイ族。

『西南……』は、タイ族の高床式住居について、盆地平野の「竹楼」を記すのみで、解放後は、磚による柱、瓦葺きに改めたものがあり、タイ族の典型的高床式住居は、諸葛孔明が家の作り方を教えたのに始まるという、つまらない伝説の紹介をしたりもしている。儀礼については、少々重要なことに触れているが、この章とは無関係なので、他の資料のほうを参照することにしたい。

他の資料[雲南省建築工程設計処、少数民族建築調査組 1963]は、たいへん詳しい。これによると、タイ族の伝統的住居は、「楼房」つまり「干闌」建築で、一般には「竹楼」と称する高床式住居であるといい、タイ族の主要集居地は、この形式に属するという。しかし、この外、雲南省玉溪地区の元江県一帯(現元江ハニ族イ族タイ族自治州)には、当地のイ族と同じ形式の「土掌房」(前記ハニ族のところで述べたが、イ族の一部にも「土掌房」がある)があり、同省徳宏タイ族チンポー族自治州の潞西



写真17 高床式住居。[雲南省西双版纳タイ族自治州景洪県曼景蘭公社・タイ族]

県、盈江県、梁河県などには、漢族住居に似た「平房」つまり平屋のものがあるという。ところで、徳宏でも、その西南端で深くビルマに食いつこんでいる部分にある瑞麗県は、高床式住居の分布地であるという。

雲南省西双版纳タイ族自治州と徳宏タイ族チンポー族自治州瑞麗県のタイ族の高床式住居は、やや異なるようだ。西双版纳には、既述のように、1978年、80年、82年と3回調査に入っているが、徳宏は未調査のままである。ひきつづき、資料によって、西双版纳と徳宏瑞麗の高床式住居についての記述を参照しよう。資料によれば、西双版纳の「院落」(庭を含む敷地)より、徳宏のそのほうが一般に大きく、西双版纳



写真18 建築中の高床式住居。[雲南省西双版纳タイ族自治州景洪県曼景蘭公社・タイ族]

のほうには、高床の脚柱高に高低の別があるが、徳宏のは一般に高脚であり、前者の住居プランは方形に近いが、後者のそれは長方形で、前者は、居間と台所を別にしてある場合もあるけれども、一般には居間の一角にイロリがあるのに対し、後者は、高床式住居の部分と平屋の部分とがあって、平屋が台所になっており、高床式住居の後方に設けられているのであるが、イロリは高床式住居のほぼ方形に近い居間の中央後方にあり、冬季のみ暖房用にするという。しかし、夏季の火のないイロリ周囲も、人々の団欒の場となっているという。また、前者の場合は、木架構で屋根は草葺きの入母屋で、「重檐」つまり2重の軒で、外壁を外向きの転びにしているので、軒を安定させるのに有利であり、底下に広く空間をとることが可能になり……、などと観察事実どおりの記述がある。そして、前述のトン族住居に比べて、杣と杣穴の結合部は、あまりきっちりしておらず、楔を必要とすることも、「構件的結合不够厳密」と記している。一方、後者の場合で注目すべきは、徳宏瑞麗の高床居間は、室内に柱がなく、別に桁が設けられて、中央の屋根を支えており、外壁に窓をあけているが、その窓の面積は小さく、位置も低いが、それは床に坐って生活する方式に適した位置であるという。さらに、前者では、床下脚柱の周囲は、開放されたままであるが、後者は、曹成章らによれば[曹 1984]、竹を編んだ囲いがあるという。

なお、もう一度雲南省建築工程設計処のほうの資料にもどると、徳宏瑞麗の高床式住居の軒も、大きく外へ張りだしているが、「重檐」ではないというので、前述のように窓があげられているのである。そして竹材がふんだんに用いられており、外壁も竹で編まれているが、竹材の表面と裏面の異なる色を利用して、異なる紋様の壁に編んでおり、床上は精緻に、床下は粗く編んでいるという。

一方、潞西県の平屋のほうであるが、平屋であるのでここに引用する必要はなさそうであるけれども、その畜舎は高床式住居風である点が面白い。略述しておく、その平屋は、主屋、台所、穀倉、畜舎の4棟が、「四合院」住居のように配置されており、畜舎棟は、高床式で、床下が家畜の飼育場になっており、床上に稲ワラなどを置くという。なお、一部旧地主の住居は、装飾にも凝るところがあって、漢族やペー族の大工に建造させたものがあるという。雲南省大理ペー族自治州の劍川県のペー族大工は、木造建築にすぐれているところがあるので有名で、ほうほうに出稼ぎにいくが、この方面にも来ていたことが、この資料によって知ることができるのである。

西双版纳タイ族自治州は、景洪県、勐海県、勐臘県の3県からなっているが、この3県とも調査で入っており、西双版纳全域のタイ族が高床式住居をもっていることが実見できたが、西双版纳と徳宏との間には、孟連タイ族ラフ族ワ族自治州があり、耿

馬タイ族ワ族自治県もある。その他の地域にもタイ族の分布がある。これらの地域にも、タイ族の高床式住居があると思われるが、目下はそれを確認できない。ただ、前記徳宏の瑞麗と潞西のちょうど中間地点にある遮放は、江応梁の資料[江 1983]によると、高床式住居があるという。したがって、瑞麗から遮放までの間には、その分布がつながってあると思われる。

なお、『西南……』は、タイ族のはしごが9段の踏み板であると述べており、他の資料でもそれがしばしば言及されるが、『西南……』は、老龍1対と、小龍7匹がタイ族にはしごの作り方を教えたという神話を紹介している。それに対し、史宗竜のほうは[史 1982]、タイ族の古歌謡に出てくるタイ族の女神の「莎麗棒」が、はしごを発明したが、その女神は人と同じように子女を生み、育てたが、はしごの踏み板の数は、その9人の子女の数である、というのを紹介している。神話や伝説の類はどうあれ、伝統的には9枚の踏み板のあるはしごが用いられたようであり、今日もその数があるけれども、かつて筆者が述べた[周 1983]ように、昔はタイ族社会が封建領主制であり、上座部仏教を信仰していたので、瓦屋根は用いてはならず、寺の前と両側には住居を建ててはいけないなど、制約があったけれども、最近では、大型化、瓦屋根化が盛んになるというように、構造自体に変化が表われているのである。したがって、踏み板の枚数の異なるはしごは、いくらでもあるようになった。

ところで、トン族やミャオ族など的高床式住居が、コウヨウザンを木材として用いているとすでに述べたが、西双版纳にも、コウヨウザンはあることはある。しかし、それが用いられず、「鉄刀木」（「黒心樹」ともいう）というタガヤサン（学名 *Cassia siamea* で、タイ王国のタイ語では *Mai Khilek* という）、その他の木材が用いられているのには、理由があるようだ。それは、資料によると[中国科学院自然科学史研究所(編) 1985]、8月に伐材するのは、虫害を防止できるからだとされているからで、マツやコウヨウザンは、シロアリなどが好むので用いなく、常用されるのは、「臭椿」、「黒心樹」（「鉄刀木」が正式名）、「毛栗」およびタイ語で「麦干令」（マイカンリンの音訳か？）と称するものなどで、これらは、固く、防虫、防腐性があるという。しかも、あるものは、使用前に汚水につけておき、虫害を避けるが、竹材に対してもこのようにすることがあるという。

禹平華らの資料[禹・他 1982]は、もっと詳しい。高床式住居のどの部分には、どの種の樹木や竹が用いられるかを述べ、植物名に学名とタイ語名（ただし漢字をタイ語音にあてている）を付けた表のある論文であるが、その中の、伐材季節などを述べた部分には、一般には雨季の後期である10月前後に始めるといい（前の資料の「8月」

とするのと食いちがっている)、伐材した木は、原地にそのまま置いておき、11月から12月の雨季の終了後に、一定の寸法にしたがって、梁や柱や板などに現地で加工してから、人や牛によって村まで運ばれ、2月から4月の当地の乾季に、新築するのに用いるように準備するという。なお、禹平華らの別論文[禹・他 1985]も、これらの点について詳しい。

空格人・阿克人：

次は、『西南……』のタイ族の次に出てくる民族へ話題を転換しなければならない。

しかし、その前に追加しておくことがある。写真資料[安・劉(編) 1984]だけで、詳しくは不明であるが、西双版纳のまだ民族識別の終了していない空格人、および阿克人の双方とも、高床式住居の一部が写っているので、空格人と阿克人にも高床式住居があるといえそうだ。

リス族：

では、次は、リス族について。

まず『西南……』によって見ると、ここには雲南省怒江リス族自治州の全域かどうかはわからないが、怒江地区として、竹木架構の「小楼」があるという。それは、数10本の杭を基柱としてうちこみ、高大な数本を全住居の支柱とする外は、その上に床板を敷き、草で屋根を葺くか、木片を瓦のように葺くもので、竹の木舞の壁が床上にあり、数10本の脚柱があることによって、人々はそれを「千脚落地房」と称しているという。そして、その麗江ナシ族自治県に近い所では、木架構の「楼房」で、その周囲は方木を積み重ねたものというので、この「楼房」は、校倉造の高床式のものであろう。また、漢族やその他の民族の影響によって、少数民族のリス族は、土木または磚木架構の住居も作るといっている。

別の資料[傈僳族簡史編写組(編) 1983]によると、怒江地区だけでなく、四川省渡口市所属の塩辺県一帯のリス族も、「竹篾房」(「千脚落地房」ともいう)と校倉造の住居が主で、麗江ナシ族自治県、徳宏タイ族チンポー族自治州、西昌(西昌市のことか、その中の西昌県のことか不明)地区などは、土木架構が主であるという。さらに、これには、怒江リス族自治州の蘭坪県、迪慶チベット族自治州の維西リス族自治県一帯のリス族は、校倉造を好むと述べているが、こちらは、それが「楼房」なのかどうかの説明がない。上の資料と地域が異ならないと思われるので、高床式の校倉なのであろう。なお、この資料も、漢族、ペー族、ナシ族と混居する「内地」のリス族は、土

木架構の住居に住むと述べている。

なお、四川省民族研究所の資料[四川省民族研究所(編) 1982]のほうは、四川省内のリス族分布地は、涼山イ族自治州と渡口市で、そのうちの徳昌県南山公社と金沙公社、塩辺県の岩門公社、米易県の新山公社がその集居地で、会理県、会東県、木里チベット族自治州、それと渡口市郊外のリス族は、ほとんどが漢族、イ族、ナシ族などと混住していると、リス族の分布地については詳しいが、伝統的リス族住居は木架構のもので、木壁、切妻、草葺きのいわゆる「木籠子」であるとするのみで、具体的には、地床式なのか高床式なのかを明示していない。しかし、これまでの資料との関係を照合すると、これは前記の「竹篾房」もしくは「千脚踏地房」の、単なる別称のようである。

ワ族：

次は、ワ族。

『西南……』は、漢族の影響にある所では、4面の壁が着地している「草木房」で、木材を支柱とし、竹を編んだ壁で、草葺きだという。そして、「土壁草房」や「瓦房」も少しはあるというが、これらは高床式と無関係である。次いで、雲南省臨滄地区の滄源ワ族自治州では、タイ族の「楼房」に似ているがとしているので、高床式住居になるが、家屋の外側前と後とに「厦」つまり庇がそれぞれ張り出しているもので、「鬼門」、「火門」、「客門」という三つの門があり、イロリも「主火塘」、「客火塘」、「鬼火塘」の三つがあるという。さらに、思茅地区の西盟ワ族自治州では、「大房子」つまりロング・ハウスと、前記のような一般住居とがあるという。両者とも、形や内部構造の点では同じであるが、屋根棟の両端に、前者では木彫りのツバメと男性の裸体像があるという。

別の資料[佤族簡史編写組(編) 1986]の場合は、その高床式住居は、タイ族から学んだといわれているとする。そして、高床式住居に大と小のちがいがあって、大は、上記のと同じように、三つのイロリがあるけれども、小のほうは主間と客間の2間だけで、「主火塘」と「鬼火塘」の二つのイロリがあるだけだという。「大房子」の記述は、前の資料と大差ない。

さらに他の資料[田・羅 1985], [民族問題五種叢書雲南省編集委員会(編) 1983a, 1983b, 1983c]を見ると、それぞれ、詳細なところもあるけれども、基本的なところは、前の資料と大差がない。しかし、前記郭湖生の談話によれば、1958年に調査したワ族(西盟ワ族自治州の)の高床式住居は、自然木を利用した股木で床梁を受けて支

え、その上にまた軒桁を置いて屋根を支えるものだという。なお、その壁も床も丸竹に多くの割れを入れ、節をとり、足でのしたのを用いているという。

ラフ族：

次は、ラフ族。

ラフ族は、雲南省の臨滄地区の臨滄ワ族自治県、耿馬タイ族ワ族自治県、思茅地区の瀾滄ラフ族自治県、孟連タイ族ラフ族ワ族自治県に多く、思茅地区の鎮沅県、景谷県（今日の景谷タイ族イ族自治県）、思茅鎮、普洱県（今日の普洱ハニ族イ族自治県）、墨江県（今日の墨江ハニ族自治県）、江城ハニ族イ族自治県、玉溪地区の元江県（今日の元江ハニ族イ族タイ族自治県）、さらに西双版纳タイ族自治州、紅河ハニ族イ族自治州などで、漢族、タイ族、イ族、ハニ族、ワ族、プラン族などと混居するものがあるようだ。この分布を示した資料〔国家民委民族問題五種叢書編集委員会中国少数民族編写組（編）1981〕によると、『西南……』が、すべて竹木架構の「桩上房屋」で、階上に人が住み、階下に家畜を飼う、というのと同じような説明が出てくるが、こちらは、さらにそれはタイ族の「竹楼」に似たものだという。そして、もう一つは、大型の「楼房」があることで、漢族やイ族などと混居したり、隣接地域にあるラフ族は、漢族式の土壁平屋に住むという。

このうちの「竹楼」と大型の「楼房」は、高床式住居であるが、前記郭湖生の談話資料によれば、ワ族のものよりは少々よいけれども、やはり比較的に粗末な高床式住居であるという。しかも、その屋根の棟は、軒より長いともいう。その瀾滄ラフ族自治県の調査時のフィールド・ノートのスケッチをコピーした図によれば、前記ワ族同様、股木で床梁を受けて支えるものであった。

スイ族：

次は、スイ族。

『西南……』は、スイ族は柳江と竜江の上流に分布、平屋と「楼房」があり、後者は階上に人が住み、階下に家畜を飼うと、簡単な記述で高床式住居の分布のあることを説明している。

スイ族は、主として貴州省黔南ブイ族ミャオ族自治州の三都スイ族自治県、荔波県、独山県、都匀市、黔东南ミャオ族トン族自治州の榕江県、黎平県、凱里市などに分布しており、広西チワン族自治区の西北部にも少数が散居しているようだ。筆者は、その中心地である三都スイ族自治県で、1985年に調査を行なった。都匀市、榕江県など



写真19 巨大な高床式住居。床下は囲われている。[貴州省黔南ブイ族ミャオ族自治州三都スイ族自治県安塘水寨・スイ族]

にも同じ時期に入っているが、これらはスイ族に関する調査の目的で入ったものではない。三都では、その県城から南方 26 km に位置する安塘水寨を訪れた。200数戸で1,000余人の人口の所で、住居は木架構のものであるが、平屋、高床式住居、懸造の「吊脚楼」の三者ともあるが、高床式のが最も多い。いずれもかなり大型で、高床式も、他の民族で見たものに比べてやはり大型であった。興味ぶかいのは、ここの高床式住居は、大型であるにもかかわらず、そのうちには、先に太い柱を立てて床を作り、その上に上層部を作るというのがあることだ。「吊脚楼」は、必ずしも斜面があるから作るというのではなく、主屋が別にある、その主屋の前半部に「吊脚楼」の脇部屋を作って、廊下で主屋と往来するようにしたのもあるのである。

なお、席克定によれば[席 1984]、甲雄公社のスイ族の古石板墓の甲找石板墓に高床式住居の彫刻のあるのが、写真入りで報告されている。

チンボー族：

次は、チンボー族。

『西南……』は、草葺の「竹楼」が多く、階上は、階下はと例のごとく高床式住居であることを説明するが、長廊形のが多く、一端の門から入ると、やや長い「過道間」つまり通路の間があるといい、そこにある1本の木柱は人口、労働力、家の大きさによって大きさは異なり、その間を通るとはしごがあって、上に登ようになっているなどという。この1本の木柱は、一体なんの役をもつのか、説明不十分でよくわから

ない。他の資料[景頗族簡史編写組(編) 1983]によっても、詳細はわからない。ただ、前記郭湖生の雲南省徳宏タイ族チンポー族自治州瑞麗県の南京里寨のスケッチ図のコピーに基づけば、それは、床を支える数本の脚柱とは別に、床を貫く数本の屋根棟を支える柱があるので、その柱のうちの1本を述べているのかも知れない。

それはさておき、チンポー族は、徳宏に集中して分布しているのであるが、臨滄地区の耿馬タイ族ワ族自治州、思茅地区の瀾滄ラフ族自治州などにも分布があるが、ビルマ側にもその分布があり、ビルマではカチン族と称している。

パラウン族：

次は、パラウン族。

パラウン族は、これまで「崩竜族」と称されてきたが、これは多少蔑称のきらいがあるので、いくつかの自称の一つをとって、1985年9月17日から、「徳昂族」と称されることになった。

『西南……』は、パラウン族の住居は竹木架構の「矮脚竹楼」つまり脚柱の低い高床式住居であるという。そして、雲南省徳宏タイ族チンポー族自治州のは、ほとんどが小家族であるが、臨滄地区の鎮康県には、多くの小家族が一つの「大房子」に住むのがあるという。ただ、この低脚の高床式住居とロング・ハウスの詳しい点は不明であるが、他の資料[中国科学院自然科学史研究所 1985]によれば、パラウン族は、人数が少なく、そのわりに広い地域に分散居住しているが、徳宏の潞西県とその付近の鎮康県において、他の周辺民族の高床式住居と大差のないのをういているが、最近まで同一血縁関係のある数家族で「大房子」に住むのがあると述べ、その大きさの具体的数字や建築学的特徴についても、かなり詳しく述べている。しかも、低脚のほうも、ロング・ハウスのほうも、スケッチ図と平面プランの図があり、ロング・ハウスのほうも高床式のそれであることがよくわかる。

ヌー族：

次は、ヌー族。

ヌー族は、雲南省怒江リス族自治州の碧江県、福貢県、貢山トールン族ヌー族自治州、および蘭坪県の菟峨公社に分布するが、少数が同省迪慶チベット自治州の維西県(今日の維西リス族自治州)にも分布しており、「木板房」と「竹篾房」に住むが、それは、木の杭上に板または竹を編んだものを床にしたものであるという[国家民委民族問題五種叢書編集委員会中国少数民族編写組(編) 1981]。同様に、『西南……』も、

この2種があると説明しているが、こっちは、さらに2種とも、たいてい二層になっており、階上に人、階下に家畜という説明を追加しているので、高床式住居のあることがわかる。しかし、ヌー族に関する住居は資料にとぼしく、詳しくはわからない。

トールン族：

次は、トールン族について。

『西南……』は、竹木架構の低い「楼房」が多く、2種あって、その1種は丸太を積んだ校倉で、地面から2、3尺のところに床板を敷き、低い高床であるという。もう1種は形は前者と変わらないが、材料は竹で、4壁も竹を編んだもので、木のはしごを用いる「竹楼」であるという。

他の資料【雲南省編集組(編) 1985]も、同じように、トールン族の住居を「木罌房」と「竹篾房」の2種があるとし、前者の校倉のほうは、チベットから早期に、後者のほうは、解放後にリス族の様式を学んだとしている。それ以外の詳しいことは、わからないようであるが、昔は、トールン族にも樹上家屋⁹⁾があったようである。

汪寧生は、雲南省臨滄地区の滄源ワ族自治州において発見した「崖壁画」、つまりロック・ペインティングについて、調査し、報告した[汪 1985]が、第2地点1区と第4地点1区の「干欄」の崖壁画は、3種あり、1種は家屋部が楕円に近い形をなすもので、1種はそれが三角形をなす形の切妻型のもので、もう1種は屋根の棟のほうが軒より長い形式のものであるという。そして、最初のは、今日でもワ族やその他のやや原始的民族の高床式住居にも見られるし、2番目のは、タイ族とその周辺民族の高床式住居にも見られるが、最後のは、インドネシアのスマトラにはあるがと、ハイネ・ゲルデルンの『スマトラ民族誌』の例を述べ、雲南の少数民族においては、今日すでにこの種のタイプはないけれども、古代にはあったことが、雲南の青銅器や銅鼓紋様中から発見できるとしている。晋寧石寨山漢墓出土の青銅貯貝器その他に見ることのできる、あの住居形式のことをいっているのである。

汪寧生は、つづけて第5地点2区と5区の崖壁画について述べる。

それは、樹上家屋の崖壁画なのであるが、古文献でいうところの「巢居」の樹上家屋が、雲南の各民族中で、ただトールン族だけが、清朝末葉にまでもっていたと、清

9) 樹上家屋は、高床式住居の変種とみなされており、ハイネ・ゲルデルン、その他によってとりあげられたことがあるが、近年は、大島襄二によるパラワン島のケン・エイ族のそれが報告されており、ケン・エイ族のすべてが樹上家屋ではないが、それは自然の樹木だけを柱とするものでなく、材木をも何本も用いており、焼畑のための移動によって、その住居も転地するという[大島 1973]。

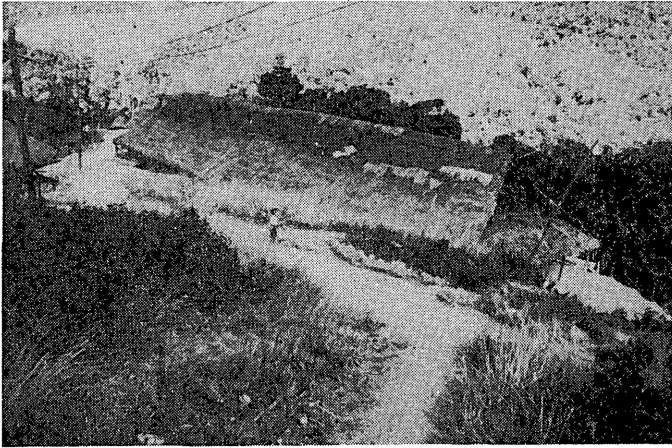


写真20 地床式のロング・ハウス。[雲南省西双版纳タイ族自治州景洪県竜
帕寨・チノー族]

朝の夏瑚の『怒球辺隘詳情』からの情報として、伝えてくれている。汪寧生は、さらに、解放初期でも、まだその種の家屋の残存があったと、王均の「独竜族的崖居和樹居」(未刊)から引用紹介している。

チノー族：

次は、『西南……』で高床式住居のあるものとして最後に出てくるチノー族。

『西南……』は、高床式の1種は、「竹楼」で、もう1種は、父系の数家族の居住する「大房子」、つまりロング・ハウスで、これは長い大「竹楼」であるという。

チノー族は、雲南省西双版纳タイ族自治州の景洪県の攸楽山(海拔 1170 m)の基諾洛克公社に住むが、筆者は、1980年の西双版纳訪問時に、その竜帕寨の竜帕新寨生産大隊を調査した。73戸、303人の村であったが、住居は、ほとんどが低脚の高床式住居で、ただ一つのロング・ハウスが残っているだけであった。ロング・ハウスは、高床でなく、その中のしきられた各部屋は、小家族がそれぞれ用いるもので、地床にそれぞれのイロリがあった。しかし、ロング・ハウスの前にあったいくつかの倉庫は、高床倉庫であった。

朱宝田によれば[朱 1982]、ロング・ハウスは表にまとめるほどの数があり、かつそれらは高床式のものであるというが、今日は、上記のように、ただ一つを残すのみで、しかも、それは地床式のものであった。

以上、『西南……』に出現した住居資料を検討しながら、他の資料をも援用して、

高床式住居（懸造・校倉のそれ、樹上家屋も含む）の分布を調べたが、すでに『西南……』に含まれていなかった民族、たとえば、リー族、あるいは、民族識別未完了のたとえば、僮人、空格人、阿克人、あるいは、漢族の客家と水上居民の高床式住居にも言及した。また、現在はないようだが、その民族もしくはその民族の祖先がかつてはもっていたと思われる、ペー族の例もあげた。

ここにそのすべてを再録すると、チベット・ロツパ・イ・ヤオ・ペー・ナシ・プミ・ミャオ・リー・チワン・プイ・トン・ハニ・プラン・タイ・リス・ワ・ラフ・スイ・チンポー・パラウン・ヌー・トールン・チノノの各少数民族と、漢族の客家・水上居民、および、僮人・空格人・阿克人である。

しかし、これら以外の民族にも高床式住居がある。以下においては、『西南……』をたたき台にして検討する際、きっかけがなくて触れることのできなかつた民族の高床式住居に触れることにする。

トゥチャ族：

まず、トゥチャ族について。

トゥチャ族は、湖南省西部の湘西トゥチャ族ミャオ族自治州の永順県、竜山県、保靖県、古文県と吉首市近辺にも分布している。湖北省西部にも分布があり、鄂西トゥチャ族ミャオ族自治州の来鳳県、利川県、鶴峰県、咸豊県、宣恩県がその分布地である。また、四川省の涪陵地区は、湖南省、湖北省、貴州省に3方を囲まれており、その西陽トゥチャ族ミャオ族自治県、秀山トゥチャ族ミャオ族自治県、黔江トゥチャ族ミャオ族自治県、彭水ミャオ族トゥチャ族自治県、石柱トゥチャ族自治県にトゥチャ族の分布がある。

筆者は、このうちの湖南省湘西トゥチャ族ミャオ族自治州を1985年に調査した。しかし、その調査は、懷化地区から北へ向かって、自治州内の鳳凰県を経て、州都の吉首市までの部分のみで、トゥチャ族がさらに多くなる吉首市以北へは入っていない。このコースでも、高床式住居はあることはあるが、むしろ地床式住居のほうが多い。

したがって、文献資料によることにする〔譚 1984〕。譚明華は、「鄂西」つまり湖北省西部の「吊脚楼」には、主屋の「正屋」と両脇部屋の「廂」が、全部宙にある「全吊型」と、一部が宙にある「半吊型」とがあり、後者はさらに、両脇部屋が宙にある、主屋が地床式である「双吊式」と、東西どちらかの脇部屋だけが宙にある「単吊式」とに分かれる、という。いずれも、「穿闘式」の木架構で、桷と桷穴による仕口はぴったりとしており、釘など用いなくても、耐久性のある建物になっているとい

い、屋根は、切妻、入母屋、あるいはその両者を兼有するのがあるという。「鄂西」でも、特に利川県一帯は、「双吊」または「単吊」の半高床式住居が多く見られるそうである。

四川省のは、資料[四川省民族研究所(編) 1982]によれば、トゥチャ族の住居は、一般には木架構瓦葺きのものか、竹を編んで壁とした草葺きのものであるとするだけで、高床かどうかは不明である。

しかし、別の資料[賈 1985]によれば、四川省東部の石柱トゥチャ族自治県での高床式住居の見聞記もあり、トゥチャ族の独特な風格をもつ「吊脚楼」は、トゥチャ族の標準的住居形式であって、全木架構で、階上に廊下があるとし、農村で新築している場合も、そのほとんどはやはり「吊脚楼」であったという。したがって、四川省のトゥチャ族にも、高床式住居のあることがわかる。

高山族：

次は、高山族、つまり日本でいわれていた台湾の高砂族。

高山族については、しばしば東南アジアの住居研究で言及されているので、ここでは簡単に触れるだけにする。たとえば、杉本尚次[杉本 1977]も、高砂族のアミ族、ツォウ族、パイワン族の付属建物(集会所と高倉)が高床式である例を挙げており、さらにヤミ族、タイヤル族は、外敵を見張るのを主とし、男女の集会にも用いる望楼があり、それも高床式の建物だとしている。さらに、現在漢族化した平埔族の中には、かつて高床式住居があったことが知られているという。

重慶の漢族：

最後にもう一つ、漢族の例を挙げておく。四川省重慶市の「吊脚楼」である。

邵俊儀によると[邵 1981]、重慶は起伏のはげしい都市で、到る所に坂があり、そのため一部の地域に「吊脚楼」が今日でも多く見られるが、この種の民家は、過去においては、重慶の中下層住民の傾斜地における居住様式であったという。そして『華陽国志』の記載によれば、後漢の頃、重慶はすでに「皆重屋累居」であったというので、この種の建築は、さらに早い時期から重慶に出現していたであろうという。さらに、この「吊脚楼」は、古代長江中下流域一帯の「干欄」建築とある種の系譜関係があるように思われるとし、その共通点は、建物下部があいているところであるが、それぞれの立地環境が異なったりするので、両者にもいささか異なるところがあり、「干欄」式のほうは柱で建物を支えて下部をあけているが、「吊脚楼」のほうは、下部が

あいてはいるが、その上部の建物の一部だけが柱によって支えられており、他の一部は斜面の岩上に置かれているという。

邵俊義のいう「吊脚楼」は、いわゆる懸造であって、それと「干闌」の高床式住居を区別すべきであると述べているのだが、すでにいくつもの前例で示したように、「吊脚楼」は懸造を意味する場合もあったし、高床式住居を意味する場合もあった。人によって異なる場所があったのだ。いずれにしろ、広義に解釈するとすれば、懸造も高床式住居に含めることが可能であろうから、重慶の例も追加することになった。

それはさておき、邵俊義は、その「吊脚楼」を「陡坡附崖式」と「中坡分台式」とに大きく分け、「陡坡附崖式」をさらに「下落式」と「爬式」の2種に分けている。いずれも側面図などがていねいにスケッチされており、参考になるが、本章は高床式住居の分布を確認するのが目的とするので、その詳細は割愛する。しかし、重慶の「吊脚楼」は、「榫卯」つまり枘と枘穴による結合方法を用いるのではなく、一層原始的な方法である竹条で結紮する特徴があり、そのためか、壁面は竹を編んだ上に漆喰を塗る、軽量壁であることをここに述べておく。

以上で、中国における高床式住居（懸造、高倉なども含む）の分布を、可能な限りの資料でもって調べたが、大きくまとめてみると、高床式住居は、今日なお、西南中国（狭義）の雲南省、貴州省、四川省と、華南の広西チワン族自治区を中心に、西はチベット自治区内の森林のある一部地方、北は湖北省西部、東は湖南省西部、南は広東省の海南島にまで分布しているといえる。

考古学的資料によって分布を見ると、その分布は一層広く、長江中・下流域以南の、現在ほとんどが漢族によって占められている地方にまで拡大されることになる。もちろん、今日でも、漢族といえども、その一部には前述のごとく、高床式住居に住む者もあるのである。

Ⅳ. 儀礼をめぐる

筆者はかつて、中国の民家を巨視的に「壁型」、「屋根型」、「折衷型」に分け、新築の際のめでたいことばを書いた赤紙を貼る場所が、「壁型」では門の周囲に、「屋根型」では柱に貼るということで、一方が門を重視するのに対し、他方は柱や梁を重視するように思われる、とした。高床式住居は、この「屋根型」のほうで言及した【周1984a】。

高床式住居の建築儀礼で、柱や梁が重要視されるのは、その建築の主たる構造体が柱と梁の組み合わせによっているから、柱や梁に象徴的意味をもたせると、建築物そのものに新築された意味が与えられるのであろう。

もちろん、すべての中国における高床式住居が、その新築の際に、柱や梁にめでたいことばを書いた赤紙を貼るわけではない。新築儀礼の一部をなす立柱式で、柱の中でも、特に中柱を重視する場合もある。

たとえば、前章でしばしば言及し、検討のたたき台にした『西南……』の、タイ族の高床式住居を記した部分は、張紫晨の著書[張 1985]にも引用されたりしているが、そこには大略次のようなことが述べられている。

伝統的には、吉地を選び、犁などでその土地を平らにし、柱を立てる石を置き、立柱架梁する。主要なものは中柱で、中柱を選ぶのは、厳粛な行事になる。中柱を選び、それを伐って山から村へ運ぶとき、村人はそれを迎えに出て、水をかけて祝福する。立柱は、まず中柱を立てるのに始まる。中柱は、一般には8本で、そのうちに「男柱」(紹岩)と「女柱」(紹嬭)の別がある。立柱時に、男柱、女柱にそれぞれ男女の異なる服を「着せる」場合もある、という。

しかし、タイ族の新築儀礼には、トン族やその他のいくつかの民族に見られる、棟上げ式がない。新築を祝って行なう「賀新房」は、民間歌手のザンハをよんで、めでたい歌をうたわせ、人々に酒とごちそうを振る舞う。その後吉日を選び、引っ越すことになるが、「賀新房」は、建築関係総費用の2倍ほどもかけて行なうのは、前にも報告したことがある[周 1983]。

「賀新房」の様子は、必ずしも同じではないが、芳莹の記した西双版纳の例[芳 1982]も、その1例になるだろう。1982年の西双版纳での調査で、タイ族の大工頭に相当する人である波玉光(雲南省西双版纳タイ族自治州景洪県曼景蘭人民公社出身、当時66歳)から、タイ族の建築の方法とか新築儀礼についていろいろ教わったが、それも芳莹の例とは必ずしも一致しない。詳細は省くが、タイ族の現今の建築儀礼は、どうも原形を消失し、上座部仏教に関連する行為が、原形を覆ってしまった感がある。解放後の変化もまたある。

その印象は、文献[祐巴勐 1981]によって強められた。それは、タイ族の詩人で理論家が、430余年前に書いたものと、300余年前に書いたとされる2論文を収めたものであるが、そのうちの『論傣族詩歌』は、タイ暦976年(西暦1615年)に、古タイ語によって書かれたものである。その作者名は不詳¹⁰⁾であるが、作者は祐巴勐に属する大僧で、32年間僧であったという。しかし、僧位にありながら、仏教に制約されずに、

あるいはむしろ仏教を批判するところがあり、ところどころに仏教以前のアニミズム時代の、タイ族の村を作り、家を創造したという「叭桑木底」(〈Pha〉somthi の漢語音訳)が、称賛されて出てきたりする。そして、われわれの古来の「賀新房」の歌、祖先が伝えてくださった歌を聞いてほしい。そこには「王子柱が立った。公主柱も立った。32本の柱が立った。早く梁をかけるよう。……」など、柱と梁を重要視することばも出てくる。

いずれにしろ、今日上座部仏教を信仰するというタイ族であっても、アニミズム的信仰の痕跡もある彼らであるが、その昔の原初的建築儀礼というものは、おそらく仏教とはまったく無関係のものであったろう。それは、具体的にはどんなものであったのか、目下知るすべがないが、現在の建築儀礼が、かれらの原初的伝統のままであるとはいえないであろうことだけは、確かだといってよいだろう。

本稿は、高床式住居の儀礼そのものを詳述するのを目的としない。その種のものは、いずれ別稿で報告することになるかも知れないが、今はまだ充分資料があるわけではないのである。

しかし、現在手持ちの断片的資料のすべてをここに出す必要もないだろう。というのは、本稿で高床式の儀礼に言及するのは、儀礼をめぐる話題を提供することだけを目的とするからである。

という次第であるので、以下においては、簡単に現有資料のいくつかだけを挙げて、将来の探究の材料としたい。

筆者は、広西チワン族自治区の三江トン族自治県のトン族の棟上げ式について、簡単な紹介をしたことがある[周 1984b]。再録すると——その棟上げ式であるが、これは梁を上げる段階と梁を踏む段階の二段階になった儀礼である。赤布とモチ穂の束を付けた梁を徐々に持ち上げ、柱に渡すとき、主人側は爆竹を鳴らし、モチを観覧者にまき与える。これが、梁上げの儀式。ついで行なわれる梁踏み儀式は、大工の代表が梁の上を歩いていき、「カumm」と称される、彼らの民族服に用いられる紫色の布を、骨組みの一部にくくり付けてから、モチを手を持ちながら、いろいろ吉祥のことばを述べるものである。——というもので、つづけて、新居が完成すると、新築祝いを行なう。そのときも「油茶」を作り、酒宴を設け、歌を歌って祝うことになるが、

10) 出身僧位の祐巴勳を仮の著者名として、古タイ語で書かれた論文を、現代漢語に訳したタイ族の岩温扁は、この論文が発見されたとき、その持ち主が、かつては「召片領」(領主の大地の主を意味するツァオ・ペンデインの漢語音訳)や勳竜の「土司」(地方官)は、これを叛逆の書としてきびしく管理をしており、みだりに写したり読んだりしてはならないと規定していたといい、さらにその持ち主は、文化大革命の家宅捜査で発見されてはならないと、ナイロン袋に入れ、それをさらに魔法瓶に入れて、土に埋めてかくしていたのだといったという。

「油茶」¹¹⁾にはモチが用いられる。また、酒宴のほうでも、ナレズシ、おこわ、モチ米を発酵させた酒など、モチ稻と直接もしくは間接的に関係するものが出てくることになる。——として、広西チワン族自治区三江トン族自治県のトン族の、このときは、モチ米利用の話がテーマだったので、このように述べた。

このトン族の棟上げ式とはほぼ同じ記載が、烏丙安の著書にもある[烏 1983, 1985]。民俗学の概説書であるからか、詳しい地名が略されており、広西、貴州、湖南の境界を接する地区のトン族の山村では、人々が「杉木楼」(コウヨウザンの木の高床式住居)に住んでいる、というように述べてから、少々他のことに触れ、そしてトン族の棟上げ式の例が出てくるだけである。

これに対し、楊通山らの編集した本[楊・他(編) 1983]は、三江トン族自治県の独峒の資料であると場所は明確にして、棟上げ式の例を紹介している。その例の前後にも、関連するものがあるので、やや長くなるのを少し圧縮して、次に引用しよう。

「一軒の高床式住居を建てるには、百本近いコウヨウザンの木がいる。だれかが家を建てようとしていることを知ると、親戚友人たちは、進んでやってきて、山から木を運ぶのを手伝う。10日間かかろうと半月かかろうと、自分の仕事をさしおいて、よろこんで手伝うのである。木がそろくと、主人は大工の親方に頼み、骨組みを作ることになる。骨組みを作っておき、それを立てることになるが、骨組み立ての日も、友人たちがやってきて、たいへんにぎわう。主人は、ブタを殺し、酒宴で人々をもてなす。数十本の柱、数百本の貫などを用いて、1、2日以内に組み立てを完了しなければならないので、人々の力を要することになる。立てるとき、まず敷地の両端に足場を立て、大工の親方の指揮によって、柱を整然と並べ、貫を通し、そしてその柱列を1列ごとに立てていき、それらに桁を渡していき、骨組みが一応できるのだが、最終的には、それに棟を載せることになる。棟上げ式には、老人も子どももやってきて、たいへんにぎわう。赤布とモチ穂をとり付けた棟(梁)が、ゆっくり昇っていくとき、主人は爆竹を鳴らし、人々にモチをまく。棟が上がると、棟踏みの儀式がつづく。大工の親方が屋上に登り、棟を踏み、この家のためめてたいことばを唱える。その手には、3個の大きなモチとトン族の紫色の布が持たれているが、その布の一端を骨組みの一部にくくり付け、他の一端を下にたらす。家主は、地面にひざまずいて、その布を受ける。大工は、棟の中間まで歩いていき、モチを高く挙げ、＜我放一個金銀替大宝＞と唱えて、その一つを布に沿って滑らせ、

11) 971頁に記載。

家主がそれを受ける。また「我要一個金銀替大宝」と唱えて、もう一つのモチをふところに入れてしまう。最後に大声で「大吉大利、大発大旺、魯班主家一家一樣旺」と叫び、人々がそれを静聴する。式が終ると、主人は大工にブタの頭、モチ穂、布を献上し、感謝の意を表わす。親戚や友人たちは、主人に対聯（門などの両側に貼る、めでたいことばを書いた赤紙）を贈り、それを柱に貼り、新築祝いとするのである。なお、棟には、赤布とモチ穂以外に、筆、墨、曆などもくくり付ける。それらは、それぞれ吉祥とか五穀豊饒、富、教養、子宝に恵まれること、永遠の象徴だとされている。その後、屋根に瓦を葺き、壁をはめ、最後は新築の家にひっこすことになるが、ひっこしの日には、人々は、モチ穂、米酒、ナレズシ（魚のも、肉のも）、鏡などの贈り物をお祝いにもってくる。若い娘たちは、祝いの歌をうたい、主人は油茶を作り、酒席を設ける。」と。

3個のモチのうちのもう1個は、そのゆくえが不明だが、要するに棟上げ式におけるモチまきのあることを、ここに銘記しておきたい。

1985年に調査した貴州省鎮寧プイ族ミャオ族自治県の石頭寨は、プイ族の石造民家で有名であることは前でも述べた。高床式住居は、見るができなかったが、その村は、平生は農務にいそしむが、大工をも兼業する者が約30人いた。そのうちの、普通は「先生」もしくは「魯班先生」と尊称されている伍起貴（同村出身のプイ族。当時73歳）に面会を求めたが、あいにく外地に出ていた。しかし、家の者が、本来は許可なく他人に見せられないがといいながらも、毛筆で書かれた彼の『魯班手冊』と表書きのあるノートを、ほんの数分間だけ見せてくれた。その目次は、(1)伐木、(2)立柱・上梁、(3)開財門、(4)関師となっており、パラパラめくると、解放後の今日に合わせて、中華人民共和国を一方でたたえる字句を織りまぜながら、その立柱式や棟上げ式の次第が書かれており、裏表紙の裏には、道教のまじないの符が張ってあった。入手することはもちろん、写真に写すことすら本人がいないからといって実現しなかったが、重要と思われるのは、「舅父」（母方のおじ）が棟上げに用いる梁に赤布を巻き、爆竹を鳴らしながら、唢呐（スルナイ、チャルメラ）を吹く者をつれて、それを贈ると、受けとるほうも唢呐を鳴らしてその一行を歓迎しながら、それを受けとるのであること。および、棟上げ式でやはりモチまきのあることである。

トン族のモチ同様、このモチも杵と臼とで搗いたものであるが、コイン、大豆なども入れる。そのモチの2個は大きく作られ、梁下にひざまずく家主に与えられるが、経済条件によって数は不定だが、残りの数百個になる小さいモチは、集まった人々にまき与えられるのである。

民間文学は、中国の民族学界で盛んに研究されている分野であり、他の物質文化などの研究がたいへん少ないのに比べて、あまりにもアンバランスのきらいがあるが、その民間文学の資料も、民俗学の資料と同じように、具体的にはどこ例なのかをあまり記さない。したがって、どこのプイ族なのかは不明だが、田兵らによると〔田・他(編) 1983〕、棟上げ式の様子がかなりよくわかる「立房歌」に関する部分がある。その「立房歌」としてまとめられているものは、大工の親方が唱える「富貴粃々」、「掛梁紅布」、「鳳凰鷄」、「上大梁」、「開彩門」という一連のものである。「粃々」は、モチのこと、「鳳凰鷄」は、鳳凰にたとえられたニワトリのことで、梁に親方が上がる際、だきかえられる雄のニワトリにちなんで歌うもの。なお、この「粃々」は色を染めたモチだと説明があるが、何色かは明記していないけれども、食紅で赤に染めたものにちがいない。「掛梁紅布」の歌は、赤布を親方が梁に巻きつけながら歌うが、その中で、プイ族の娘を「玉母娘々」が各村に産んだ仙女にたとえている。道教的ことばが用いられているのを、先の『魯班手冊』に貼ってあったまじない符とともに、やはりここに銘記しておきたい。

次は、スイ族の場合について。

1985年の貴州省黔南プイ族ミャオ族自治州の三都スイ族自治県の安塘水寨における調査で、同村出身のスイ族大工王世頭(当時45歳)からいろいろ聞いたが、彼らには『魯班手冊』のようなものがなく、建築儀礼の次第はすべて口伝するという。ちなみに、魯班はあとで少し詳しく説明するが、ここでは、大工たちがその職業神としているものであるとだけ述べておく。

この村のスイ族の場合は、山から伐った木を、その日に「柱」として立てることで運勢を見る。その日は、もちろん吉日が選ばれているのだが、いったん選ばれた日は、晴雨にかかわらず変更しない。「柱」一本を立てるだけで、倒れなければ運がよく、倒れると運がよくないとする。それを行ってから、用意しておいた柱を立て、梁を上げる。一本の「柱」立て以外の立柱式のようなものも、棟上げ式のようなものもない。モチまきもないのである。ただ、「柱」立ての前に、祖先を拝む儀礼だけがある。そのときは、モチ米で作ったおこわ、ブタ肉、酒が置かれて焼香する。酒は、一般に盃5個で、5代の人々を表わすというが、5個でなくても奇数ならよいともいう。骨組み立てに参加した人々には、やはりおこわ、ブタ肉、酒が用意されていて、宴が催されるが、魚は出さないという。ちなみに、魚は、一般には宴客に出すものであり、スイ族の「端節」(古いきまりでは、旧暦9月の第1亥の日に行なうスイ族の正月)では、最初の2回の食事(戌の日の夕食と亥の日の朝食)は、精進食でなければならな

いが、魚やエビなどの水産物は例外とされるほどで、「無魚不成年」、「無魚不成礼」（魚がないと年越しできない、および、魚がないと礼をなさない）というのに、新築の際には魚を食べないのであった。

いずれにしろ、スイ族の新築に関する儀礼に、一本の「柱」を立てるものがあるのも、「柱」が柱として意味づけられており、高床式住居で柱を重要視する、また一つの例となるだろう。

次は、ミャオ族の例を挙げる。

1985年の貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州の台江县塘壩寨の大工竜清銀（ミャオ族、当時52歳）による例。

今度は、大工の唱えることばに重点をおいて述べるだけにする。それ以外のは簡単にしておく。

吉日を選び、その日に中柱の1本を敷地に置き、まずそれに墨斗（墨壺）の糸で墨打ちをする。その後他の材料にもそれを行ない、おいておく。他日、また吉日に、大工がその師匠であった大工のために敬意を表するニワトリを殺したのをもらって帰り、それとブタ肉、酒などで焼香する。そして、骨組みを立て、棟上げになる。主人の母方のおじと娘むことが梁の細いほうの端に立ち、大工の親方たちが主人側を代表してもう一方の太いほうの端に立つ。そして、その梁をかける。はしごを登るときの唱えることばは、「四言八句」と称しているが、その全文は、原意を完全訳するのは困難なので、原文のままここに収録し、最小限の注釈だけをほどこすことにする。

はしごに足をかける前に唱え始める。

太陽出来楽陽々
賀喜主家立華堂
一進堂来二進堂
両頭生対々為郎
三進堂来四進堂
四架梯子架兩傍
四進堂来五進堂
主家請我要上梁

←ここからはしごに登る。

脚踩穩梯一步一
一定要納財
脚踩穩梯二步二

二喜好々 (「二喜」は、ジャンケン用語。「二喜」,「三多々」などと声をかけて行なう)

脚踩穩梯三步三

三元重中 (「三元」は、道教用語)

脚踩穩梯四步四

四季納財

脚踩穩梯五步五

五子登科

脚踩穩梯六步六

六位高昇 (「六」は「禄」とこの地方の漢語方言では同音になる。したがって,「六位」は「禄位」のこと)

脚踩穩梯七步七

七子成団

脚踩穩梯八步八

八方納財

脚踩穩梯九步九

九々富貴 (「九々」は「久々」と同音。末長くの意に用いている)

脚踩基方代々出官

←梁が置かれる。置くだけで、槌打ちなどしない。

梁が置かれると、モチまきになる。

モチの入った容器を大工の助手が吊り上げる。モチは、「高粱粬」と称する小さいもの多数個(経済状況によって数は異なる)と、「祀祖粬」と称する大きいもの12個で、大きいのは梁の両端にそれぞれ6個用意する。どちらもモチ米を搗いた,「喜色」つまり赤色を着けたモチで,「祀祖」の「祖」は,主人の祖先と大工の親方の祖先の意を持つという。モチまきのモチは,小さいほうを用いる。終了すると,宴会になる。大工の親方への謝礼は,活きたニワトリ3羽,ブタの大腿部1本とシippo1本,梁から降りてくるとき,あらかじめ脇にはさんでおいた「祀祖粬」1対,おこわ1かご,および18元の謝金であるという。

もう1例を挙げておく。同じ民族,同じ地方でも,いつも同じ例になるとは限らない例として。

上と同じ台江県だが,芳寨という村の元大工張勝金(ミャオ族,当時72歳,年をとったため,3年前に休職)による例。「四言八句」だけを記す。

一進堂屋四々方

四根中柱撐中梁

宝梁宝梁生在何処

宝梁生在万里青山

一梁是檀香梓

二梁是梓檀香

←ここからはしごに登る。

親戚百客両辺站

青竜白虎両辺歇

看到魯班弟子上雲梯

脚踏雲梯走一步

賀喜主人家又發富

脚踏雲梯走二步

代々主人家又發富

脚踏雲梯走三步

代々主人家做恭賀

脚踏雲梯走四步

代々四季發財

脚踏雲梯走五步

五子登科

脚踏雲梯走六步

禄位高昇

脚踏雲梯走七步

七步發財

脚踏雲梯走八步

八大發財

脚踏雲梯走九步

九步九手又扒瓜 （「瓜」は、束の「瓜柱」のこと）

賀喜主人家

←ここで梁上に達する。

走到十步登了梁

賀喜主人家發富發貴

なお、この人によれば、棟上げに用いる梁には、赤布で巻く前に、くぼみを作り、銀錠もしくは銀貨（昔の袁世凱の顔のあるものなど）、筆、墨、箸、曆（表紙に赤紙

を貼り、そこに日付を書く)を入れ、そして布を巻くのだが、梁上に四角布の対角線が梁の長方向と平行になるように布を置き、対角線上の端の2角に銀貨などを用いて打ちつけ、布を固定し、布のもう1本の対角線上の両端を、梁に巻き付けるようにして、やはり銀貨などでその端を固定する。銀貨で固定する代りに、麻ひもでくくるともあるという。

以上のように、ミャオ族の場合にも、柱や梁を重視するところがあり、モチまきがある(2番目の例でもあるのだが、略した)。さらに「四言八句」の中には、道教色のことばがまじっているのでもある。これらをひきつづき銘記しておきたい。

ところで、再びトン族について述べておくが、広西チワン族自治区三江トン族自治県のトン族と異なり、貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州の從江県の高増寨という村のトン族は、異なる建築儀礼をもっている。

やはり、1985年の調査で、その村出身の大工呉生賢(トン族、当時54歳)によると、彼らはモチまきを行っていない。三江で用いられる「油茶」もそもそもない。ただ、棟上げに用いる梁に赤紙を貼り、それに「天無忌、地無忌、年月日時無忌、姜太公在此、百無禁忌、大吉大利」と魔よけ、吉祥のことばを書き、焼香してからニワトリを殺し、その血を付けた羽毛で、それぞれの柱に血を塗っていき、爆竹を鳴らし、宴会に移るだけであるという。

これにはモチまきがなく、前述の三江トン族の棟上げ式とは異なるけれども、柱と梁を象徴的に重視している特徴は、やはりあるのである。

文献資料の紹介は、いちいち詳細に行なわれないが、トゥチャ族、その他にも、棟上げ式におけるモチまきの例がある[楊 1982], [田 1983], [彭 1985]。

それはさておき、次は、高床式住居でなかったが、ペー族の建築とその儀礼について触れることにする。地床式の住居であっても、その建築と儀礼には、高床式住居の儀礼を考える上での、重要と思われるヒントがあるからだ。

ペー族の建築技術はたいへん有名で、特に雲南省大理ペー族自治州の劍川県の大工は有名である。遠く西双版纳のタイ族地域にまで出稼ぎに行く和前章で触れたが、ビルマにまで行く者もあったという。

ペー族の建築で有名なのは、前章では、ことばだけで示した「三坊一照壁」、あるいは「四合五天井」とよばれるもの。「三坊一照壁」は、ほうぼうにある漢族住居の「三合院」と同じように、建物の棟が中庭の「院子」をコの字型に囲むのであるが、主屋棟の向かいに、大きな照壁(「四合院」住居などの目かくしの壁、かつては魔よけでもあった)があり、中庭を建物棟とともに囲ってしまうものである。その照壁は、

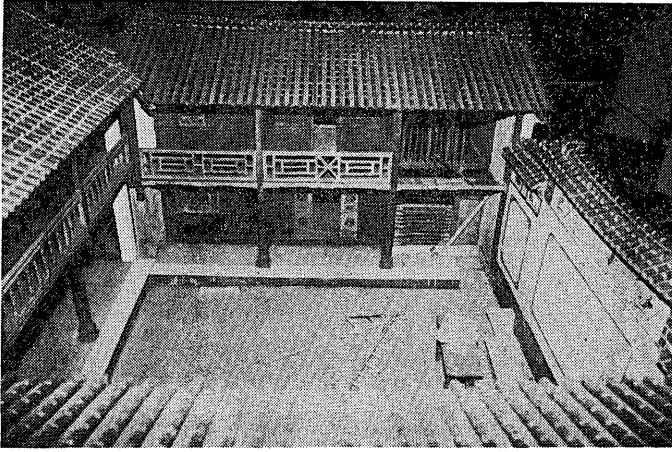


写真21 三坊一照壁（右側が大照壁）。[雲南省昆明市の雲南省博物館所蔵の雲南省剣川県のペー族住居模型・ペー族]

単に大きいだけでなく、精緻な塼彫がほどこされ、門楼もたいへんこったものになっている。「四合五天井」は、その大照壁を作らず、「四合院」住居（北京などの漢族の住居。主屋の左右両側に脇部屋があり、それらと主屋の向かいにある向かい部屋とで、中庭を囲むもの）と同じようであるが、4隅に「漏角天井」という「天井」（中庭）をもち、合計5天井となるものである。

ペー族の建築といえば、これらが紹介されているためか、すべてのペー族の建築をこういうものだと思っている人々がいるが、それはまちがっている。「三坊一照壁」といっても、大規模のと小規模のとがあり、大規模なのは、洱海という湖のそばの、

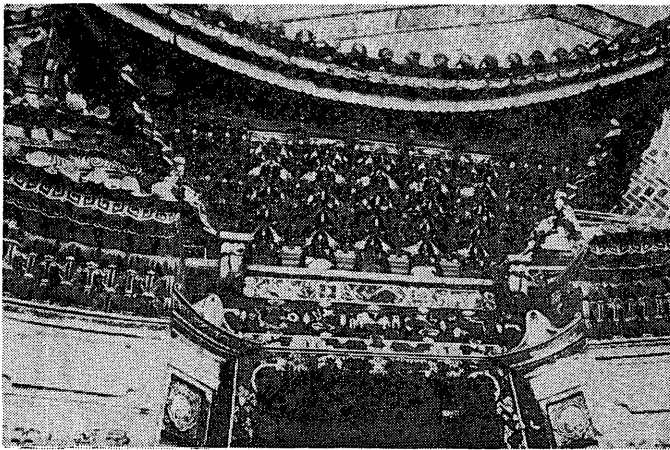


写真22 三坊一照壁住居の門楼。[雲南省大理ペー族自治州大理市喜州・ペー族]

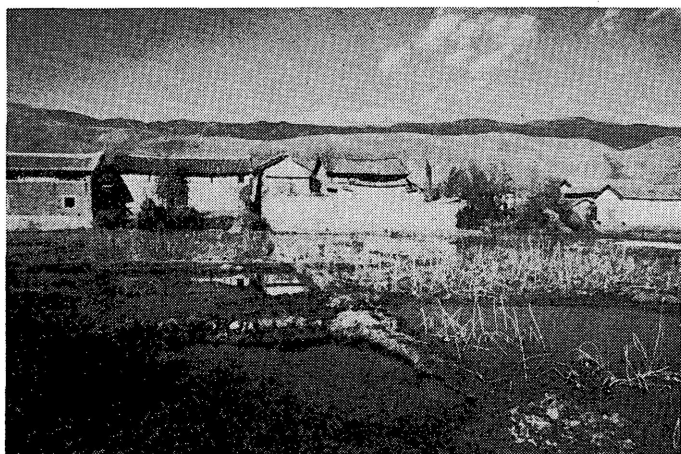


写真23 ペー族の一般的住居。[雲南省大理ペー族自治州鶴慶県三庄・ペー族]

ペー族の居住地内では恵まれた農村地帯である喜洲あたりに集中するのみで、喜洲には大資本家ですら育ったことがあり、「中西合璧」と称する中華風・西洋風折衷の住居さえあるのである。1984年の大理ペー族自治州の調査は、今日一部がすでに開放されている下関市（現在は大理市に含まれる）や大理鎮（現大理市）はもちろん、未開放の剣川県や鶴慶県もジープで走破して、麗江ナシ族自治県まで、広く観察を行なった。それによっていえることは、ペー族の一般的住居は、「三坊一照壁」などでなく、「三坊一照壁」の「照壁」に対する一つの棟だけのような住居なのである。つまり、その棟は、まん中に広間の「堂屋」があり、その左右に、あるいは左右のうちのどちらか一つに、「耳房」という部屋を作るものである。庇柱があって、庇が前方に出ているので、前方左右に小さな中庭の「天井」が、2または1あるのみ（「耳房」が一つのときは、「天井」も一つ）で、大きな中庭が前方にあるわけではなく、大照壁ももちろんない。二階は人が住む場合もあるけれども、通常は物置きとして使用し、一階に人が住む。

ただ、「三坊一照壁」にしる、「四合五天井」にしる、一般の住居にしる、建築技術のすばらしい点は共通している。建築に関しては、詳しく記した資料もある[雲南省建工庁設計院少数民族建築調査組 1963], [中国科学院自然科学史研究所(編) 1985]けれども、本稿は、それを直接のテーマとするものでないので、とりあげないが、それは、木造の「穿闔式」のきわめてすぐれたものであることは、述べておかねばならない。ただし、建物全体は、木造そのものというのではなく、板でわくを作り、その中に土を入れて搗く、いわゆる「夯土」による土壁が併用されていることも、述べてお

かねばならない。土壁は、木造住居からやや離れて作られているというのではなく、柱と密着しているか、柱の半分が土壁の中に埋没した形かになっている。したがって、「夯土」による土壁を先に作ってから立柱している場合と、立柱してから土壁を作っていく場合とがあるといえる。だからこそ、「三坊一照壁」は、「白族漢式建築」とよばれているのであろう。木架構でもう一つ追加すべきは、柱の足元にも穴があり、それぞれの柱の足部を結ぶ形で、「地脚枋」もしくは「地袱」とよばれる貫が、他の「穿枋」などとよばれる貫とともに存在すること。これのあることによって、建物の抗震度が高くなっているのである。

これら建築技術は、土壁作りや中庭を囲む形式に建てることを除外すれば、木造建築のすばらしさは、他の少数民族のそれと共通してくるであろう（たとえば、トン族のそれと）。これに留意しておき、次にその建築儀礼の特徴を見ることにしたい。

1984年の調査時は、「春節」（旧暦の正月）の前であった。文化大革命や「四人組」の時代と異なり、「生産責任制」という開放政策がとられたため、豊かになったせいもあるが、もう一つの理由として、その年は「春節」を迎えると「甲子年」にあたることになり、当地では、「甲子年」に入る前に結婚しなければならない、新築の場合は、やはりそうであるが、棟上げ式さえすませておけば、あとは「春節」になってから完成してもよい、という風習があったので、その頃は、結婚式と新築のブームになっていた。

そういう次第であるので、建てかけの家とか、棟上げ式をこれからやるとか、やっているとか、すませたばかりとかの家を多く観察する機会に恵まれた。

まず、趙鋭明の詳しく書かれたペー族の建築儀礼に関する資料[趙 1983]から、儀

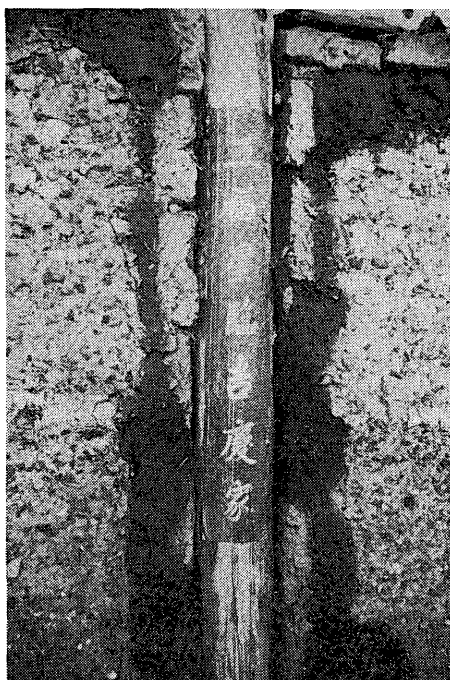


写真24 土壁に半分埋没している柱。立柱後に土壁が作られているのわかる部分である。めでたいことばを書いた赤紙が貼られている。[雲南省大理ペー族自治州大理市紅山・ペー族]

礼についての特徴を見てみよう。例によって、この資料も、大理のどこの話なのかは不明である。かなり長いので、簡略化して紹介する。〈 〉には、聞き込み調査で得た知識で、注釈を加えておく。() には単なる説明を入れておく。

——母方のおじの家が新築されることになり、祝い物を持って訪問した。新しい「前檐柱」(前方の軒柱)には「漢柏秦松光甲地, 吳山楚水壯華居」と隸書で書いた「対聯」が貼られており、その他の柱にも「磐石為基安且吉, 古松作棟寿而康」とか、「堅柱欣逢黃道日, 上梁正遇紫微星」などの対聯が張られていた。われわれの到着を見て、すばやく「拝梁堂」に案内してくれた。それは、新築の家の中央に設けられており、その最も奥に「八仙卓」が置かれている。卓上には、モミ穀付きの米が1斗満々と入れてあり、その上に「戥子」(小さな秤)、ものさし、はさみなどが挿してある。米は、新築の家が完成後、主人に年々豊作がもたらされることを表わし、秤とものさし、はさみは、はかり切れない金と銀、寸法がとれないほど多くの布、裁ち切れないほど多くの服があることを表わす。米の容器のそばには、赤や緑の色を付けた饅頭(マントウのこと、マンジュウではない)が置かれている。「八仙卓」の前にもテーブルがあり、そこに祝い物を並べるのだ。その前には「木馬」
 〈木を組んだ支柱で、一対ある〉があり、棟上げ用の赤く染めた「中梁」が横に載っている。「中梁」には、赤の大きな絹布が巻かれていて、その前には、跪拝用の座蒲団〈ワラ編みで、直径 50 cm ほど〉が置いてある。祝賀に来るどの家族も、その成年男子が「中梁」前で跪拝する〈これを「祀梁式」という〉。このとき、わが家の祝い物が運ばれてきた。父、母、3番目の弟、妹が、合計4つの大きな盆〈長

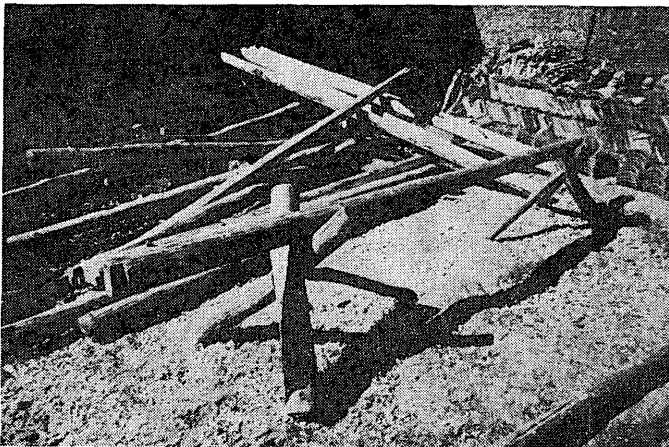


写真25 木馬。[雲南省大理ペー族自治州鶴慶県金屯・ペー族]

方形黒漆塗り、長辺約7~80 cm>を大きなテーブルに置く。父の弟の家は、4つの小さな盆<長方形漆塗り、長辺約4~50 cm>を端のほうに置く。米入りの大盆には、お金をたくさん挿している。きまりによると、贈り物は、「正親」（最も近い親戚）が大盆4つを贈り、米とコムギ粉各1斗、黒砂糖4斤（2 kg）、茶葉2斤（1 kg）とお金である。「傍親」（一代以上隔てた親戚）は、小盆4つで、米とコムギ粉各2升、黒砂糖2斤、茶葉1斤、お金若干元である。

跪拝が終わると、棟上げ式（「上梁儀式」）が始まる。騒しい声がやみ、「掌墨木匠大師傳」（大工頭）が雄のニワトリ1羽を持ち、突然人々の間から歩いてきて、「拝梁堂」前の赤い梁のまわりを厳肅な足どりで一週する。一周しながら「「鶏是鳳凰鶏，頭戴烏沙帽，身穿五色衣，今日用你做開冠鶏，保佑豎房大吉利」と唱え、唱え終わると、鶏冠から血をとり、その血を梁に滴下したく梁の両端にたらす。それは「点血」といい、棟上げ式の主要な一環をなす。その血は、邪を治すそうだ。次いで、大工頭と一人の弟子が、それぞれ腰に斧をはさみ、「拝梁堂」の両側のはしごを迅速にかけ登る。登りながら「一把梯子十三台，上了一台又一台」と唱え、骨組みの頂まで上がり、そこに置いてあった「仙人橋」（「脚手架」ともいう足場）に上がる。腰の縄を解きながら「脚踩仙人橋，一步上天堂」と唱えると、ふたりは同時にその赤色の縄を下へたらし、「繩是什麼繩，繩是東海竜王金糸繩」と唱えると、下で待ち構えていた弟子が、その縄を受け、すぐ解ける縄の結び目に赤い梁の両端を入れる。梁は、大工頭の「左辺桯的連環扣，右辺桯的扣連環，揺々擺，擺々揺，揺々擺々上天堂」と唱えるのにしたがって、上がってゆく。大工頭と弟子が、

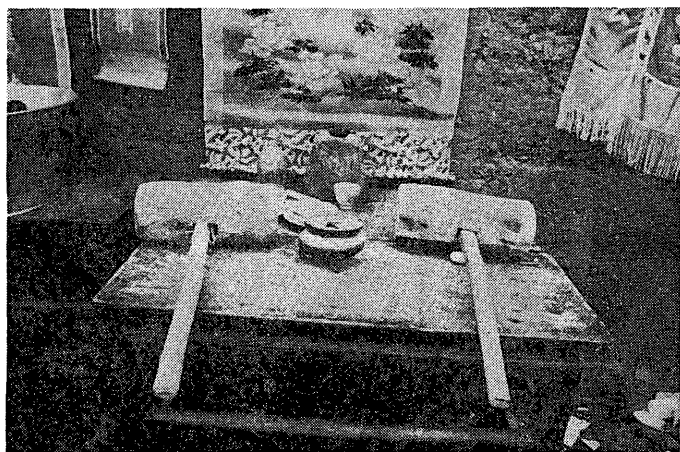


写真26 棟上げ儀式用の木槌。[雲南省大理ペー族自治州大理市紅山・ペー族]

それをすばやくとり付けたが、その打ち付け音<大きく作った儀式用木槌、赤く塗ってあり、柄は槌に入っている部分を含めて約 50 cm、槌の断面径 20 cm ほどを用いるのが普通。ここでは斧を使っているようだからその音>の中で、大工頭はさらに「梁々々、你是樹中王，今天選捉黃道日，魯班弟子用你做中梁，右入樁吉祥如意，左入樁如意吉祥」と唱えつつけた。

彼は、上から1本の縄を降ろし、中に饅頭、コイン、赤の小旗<20 cm ぐらいの>、赤の小びん<20 cm ぐらいの陶製、トックリ型の小びん、その外側を赤紙で包む>、茶びんの入った竹かごをそれに結ばせ、その竹かごを吊し上げる。まず赤旗4枚をそれぞれ2枚ずつ梁の両端に挿し、赤の小びんを赤糸で梁の中央に吊す。びんには水が入っているが、金沙江（長江の上流）からとってきた「聖水」だった<剣川県では、かつてはそこの孔子廟の水を用いた。現在孔子廟はなくなったが、依然としてその場所の水を用いるという>。聖水は、災害をなくし、禍を滅する効があるという。大工頭が赤びんを吊すと、弟子が茶びんの水を上からかけた。かけながら「水是東海竜王水，左辺澆竜頭，右辺澆竜尾，竜頭竜尾一齊澆，引得東海竜王来」と唱えた。大工頭もつづけて「主人来亮財，打開寶藏庫，遍地撒金錢」と唱えながら、コインを人々に投げ与えた。好運が得られるといい、人々はそれを争ってとる。次いで饅頭が投げ与えられる。大工頭はそれを投げながら「主人發了三斗麵，大饅々蒸了三百六一対，小饅々蒸了三百六十双，双々要成対，対々要成双」と唱えた。

棟上げ式の前日の晩にも、小さな儀式がある。「拝魯班」と「送木器」の二つである。「拝魯班」は、その晩暗くなってから行なうが、儀式は簡単で、主人と大工頭とが、1斗の米上に、小さな秤、はさみ、墨壺、酒や茶などを置き、それを「祖先堂」（祖先を祭っている所）に持っていき、跪拝して魯班先師と祖先に対し、翌日の棟上げ式の順調を祈求する。「送木器」のほうは、「拝魯班」のあと、人々が寝静まった頃に行なう。主人と大工頭とが、生ブタ肉、熟ブタ肉、煮卵、米飯、茶、酒、「木馬」、オガクズなどを持って、事前に「地師」（「風水先生」ともいう）に選定してもらった所へ行き、そこで食べられるものは食べ（生肉はそこで火を通す）<剣川県では「地師」に選地してもらわなくてもよく、村のどこで行なってもよい。肉は小塊、酒も少量でよい>、「木馬」を置いてきたらよいのである<この「木馬」は小型のもので、「送木器」の「木器」はこれを指す>。「送木器」の際は、祈りのことばなどなく、食べたらもどってくるのである。——と。

趙鋭明は、この新築儀礼は、本人の子ども時代の見聞に基づくと記している。今日では、その出身地の儀礼次第などにも変容があるかも知れないが、< >に注釈を付

けることが可能であったように、劍川県では、それと基本的には変わるところがなかったといえる。

劍川県以外の所でも、赤びんを吊すのをいく例も見たが、大理市周城の農村で数年間調査してきた、横山廣子の談話によれば、周城の農村の新築儀礼では、そのような赤びんを吊さない、という。

同じペー族でも、場所が変わると、当然のことながら小異はあるのである。

なお、Li Sen の資料 [Li 1983] の場合は、「Heqing county」つまり鶴慶県の棟上げ式に触れているが、骨組み上に立った大工が、4方向に水をまき散らすという異なるところもあるが、「伝統的蒸しパン」つまり饅頭を投げることも述べている。しかし、あまりにも簡単な記述であるので、その紹介は割愛する。

次は、劍川県のペー族大工張汝江（劍川県朱柳大隊＜元朱卷場村＞出身、当時62歳）による、いわゆる「四言八句」だけを前の例にしたがって記しておく。

まず、棟上げ式で、梁の左右両端を木槌でたたくときに唱えるのは、「道四句」といい、次のようである。

紫金梁，紫金梁

你在山中作樹王

今天魯班黃道日

取你作中梁 （「中梁」は、正確にいうと広間の「堂屋」と左右にある「耳房」の計3間のうちの、「堂屋」の上にある梁（棟）のことである）

次は、その饅頭投げのときに唱えるもの。まず、東から、以下南、西、北、中央の順で投げるといふ。

一破東，太陽正照紫微宮 （東に向かって投げる）

二破南，南現彩雲現吉祥 （南に向かって投げる）

三破西，梧桐樹上鳳凰棲 （西に向かって投げる）

四破北，四破北方壬癸水 （北に向かって投げる）

主人富貴常流水

四方破完破中央

主人跪在梁底下

接得饅頭神仙作 （神仙作は、作神仙のこと）

接不得饅頭作神仙 （中央に向かって投げる）

もっと簡単に唱えて、饅頭を投げる場合は、次のようである。

東方甲乙木	(東に向かって投げる)
南方丙丁火*	(南に向かって投げる)
西方庚辛金	(西に向かって投げる)
北方壬癸水	(北に向かって投げる)
中央戊己土	(中央に向かって投げる)

* (この火は、フオと読まない。火(フオ)は火事に通じるので、ハオと読ませる)

以上の投げる饅頭は、大型球形花型のコムギ粉でねって蒸製したもの5個で、箸先を十字に割り、それで花の中央に赤点4個が着くよう、食紅を付ける。饅頭の中には、昔は元宝や銀貨を入れたが、今日は5分(1元=10角。1角=10分)のコインを数枚入れる。この饅頭は、さらに赤紙で包んでから、投げるのに用いる。なお、人々に投げ与える饅頭は同型で小さく、赤紙で包まず、数百個を投げるという。

ちなみに、張汝江によると、今日のペー族住居は、コウヨウザンの値が高いので、ほとんどは「雲南松」(ウナンマツ)を材木にして用いるという。

さて、以上のペー族の建築儀礼においても、柱と梁を重要視している特徴や、大工が唱えることばの中に、多くの道教に関係ふかいことばの入っているのを知ることができた。これらも銘記しておかねばならないが、ここで最も記憶にとどめておきたいのは、これまでのモチまきに対して、ペー族は饅頭を投げるということだ。そこに介在する意味については、あとで検討することにした。

ペー族に関して、最後にもう一つの資料を見ることにする[楊 1986]。これは、剣川県のペー族が、その地区の建築儀礼の一面をとりあげたものである。それによると、棟上げ式の日には、全村の成年男子がそれぞれ縄1本を持ち、手伝いに行くが、主人側は食事でもてなすだけで、工銭は払わなくてすむという。棟上げが終了してからは、赤の「対聯」をすぐに貼らねばならない。「堂屋」(広間)の柱という柱は、どれも赤くなくてはならず(柱に赤の「対聯」を貼ることを意味する)、表口などは、赤で点綴しなければならない(めでたいことばを横書きして、横に貼る赤紙の「横批」を貼ることを意味する。「横批」は「横披」とも書く)。剣川では、「春節」を迎えたり、めでたいことがあると、互いに「対聯」を贈る風習があり、それをあちらこちらに貼るけれども、最も念を入れて書くのは、新築用のそれで、いかに学識がある者でも、それを書くまじりを知らない、人々の嘲笑を受けねばならないのである。その伝統的なまじりは、「堂屋」階下中央前列の左右2柱は、主人の「対聯」だけを貼り、他人は貼ってはならないが、その他の柱は、すべて親戚友人が貼るための柱なのであるとする。ただ、柱の数は限られているのに、「対聯」を貼ろうとする者のほうが多いた

めに、棟上げ終了と同時に、争って貼ろうとすることになるという。なお、「横批」は、棟上げを行なう前に、主人によって先に貼られるものである。「横批」の内容と格式も、工夫を要する。特に中央の3幅の大きいものは、伝統に応じて書かねばならず、中央のは「姜太公在此，諸邪回避」，左側のは「文曲星在此」，右側のは「武曲星在此」となるという。これにつづいて、そういうことを書く由来伝説の紹介があるが、それは略してしまうが、執筆者は、伝説には漢族文化の影響を受けた部分があり、迷信的色彩もあると述べている。この外、饅頭投げについては、どこでも普遍的にこれを行なうが、地方ごとにその特徴があるとし、その例（前で紹介した例とは異なるもの）をも紹介しているが、小異あること当然なので、ここでは、それを略しておく。

この資料をここに要約したのは、本章冒頭で記した、めでたいことばを書いた赤紙を貼る位置が、「壁型」，「屋根型」で異なるとしたことに関係するからであった。ペー族は、この点に関しては、「屋根型」にあてはまりそうだが、実際は、その住居を囲む土壁の門のまわりにも、赤い紙を貼るところがあり、「壁型」でもあるのであった。

では、次は魯班に関連したことを述べる。

魯班は、前で大工たちの職業神であると簡単に述べただけで、詳しくは後述とした。

魯班は、春秋戦国時代の魯の国の人で、公輸班のことでもある。実在したとされている人であるが、種々の彼の大工としての伝説のほうの類は、実話というよりも、伝説的な話であって、すべての名大工に関する話にさらに尾ひれを付け、それを魯班に集中させたものであろう。いわゆる始祖伝説の類なのである。

すでに前で『魯班手冊』なるものがあったことを述べたし、大工が唱えることばの

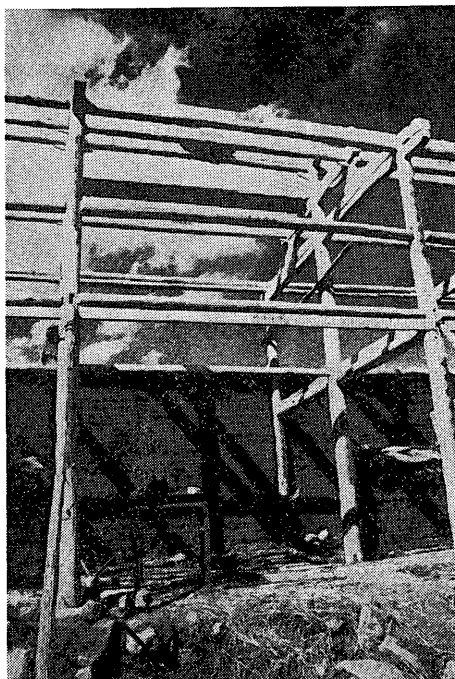


写真27 建築中のペー族住居。対聯や横批が貼られている。[雲南省大理 ペー族自治州大理市紅山・ペー族]

中にも、魯班の名が出てくる場合があった。このように、漢族間で有名な魯班は、少数民族間でも有名なのである。

この点に関して、ペー族王明達の研究資料〔王 1986〕も引用しよう。これも要点のみで記す。

王氏達は、まず、魯班に関する伝説が、漢族間だけでなく、ペー、イ、チワン、ブイ、ヤオ、スイ、トゥチャなどの少数民族間にも流布しており、漢族とペー族のそれを比較してみて、ペー族のそれが明らかに漢族文化の影響を受けてはいるが、ペー族の民族的特色も含まれているという。

ペー族の魯班イメージは、ペー族によって作られているので、漢族の魯班に関する民間文学の魯班イメージとは、自ずから異なるのであるとし、ペー族と漢族の魯班伝説の比較研究を展開している。

まず、魯班がペー族に知られるようになったいきさつを考察する。彼は、ペー族の知識分子が『礼』とか『戦国策』、『墨子』などに記載された公輸班に関する事蹟を、農民たちに伝えた可能性を否定しない。しかし、最大の可能性は、漢族の大工たちが、魯班に関する伝説の類を、ペー族の農民たちに伝えたとする。漢代、唐代を通じて、漢族大工とペー族の交流はあったが、唐代は特に著しく、唐朝は、何回も大工などの職人を、南詔国統治者がその宮殿寺廟を造営するのに派遣した。また、南詔の統治者は、数万の成都の職人技術者を掠奪して連れてきたので、それらの人々によって、魯班伝説が最初にペー族の人々に伝わったのであろう、という。

しかるに、ペー族の魯班伝説は、畢竟するにペー族の人々の再創造であるか、あるいは魯班の名を借用しての新創造であるから、そこには、漢族の魯班伝説と相似した一面があるけれども、大きなちがいもあるのであるという。

その差異というのは、伝説の中で、漢族側のは、魯班の名は魯班で、ときには自称の「姓魚名曰」が出ることもあり、「張班」は彼のすぐれた徒弟の名なのであるが、ペー族側では、「張班」は魯班の原名とされている。また、漢族側のは、魯班は中原一帯に居住していたことになっており（たとえば、魯家湾のように）、ペー族側のは、魯班の故郷がペー族の居住している雲南だとされている。あるいは、魯班のみなりに関していえば、漢族側のは、おだやかな顔、ぼろをまとい、ほうぼうに出向くときは斧やきりなどを持っているという、基本的には定型적であるのに対し、ペー族側のは、ぼろをやはりまとなっているが、片目を傷めた人で、手に傘を1本持っている姿になっている。この片目であることは、ペー族大工が墨打ちをするとき、必ず片目を閉じて行なうやり方と無関係でなく、魯班の妻が金鑾殿を作るときに困難を感じた魯班

に、傘骨の原理を教えて解決させた話が、魯班に1本の傘を持たせたのであろう、という。

その他まだ数例の差異が述べられているが、それらはすべて割愛する。

要するに、王明達のいうごとく、魯班伝説は本来漢族間に流布されたのであるが、ペー族にも伝わり、それが換骨奪胎されたのであろう。ペー族以外の少数民族で、魯班をその民族の大王の祖神もしくは職業神とするのもあったが、ペー族ほどの焼き直しは発見されなくても、多かれ少なかれ漢族のイメージした魯班像とは異なっているだろう。したがって、少数民族間に魯班にまつわる儀礼があるからといって、その儀礼すべてが、その民族本来のものではないと、全否定するのではぐあいがある。

しかし、いかに換骨奪胎があったとしても、漢族からの儀礼要素が、その本来の原初的儀礼に加わっていることまで否定できない。

という次第であるので、ここに本章の結論的なことをいえば、道教的要素、魯班に関する要素、「対聯」のような赤紙を貼る要素などは、今日のその民族の建築儀礼にかかわる要素であることはまちがいないとしても、それらは、原初的な伝統的建築儀礼ではないということになる。

ただ、たとえば、「対聯」などをやたらに柱に貼るのを重視することなどから推察されようが、柱を重視すること、梁を重視することなどは、本来的なものであろう。また、モチまきも、その高床式住居の存在する地域の生業的、生態学的環境から推察すれば、これは漢族からの影響というより、むしろ少数民族本来の儀礼要素の一つであるといえるだろう。

モチまきは、いちいち詳しくは述べないが、江蘇省の漢族民家の棟上げ式など、南方漢族の場合でも、行なわれている例が多々ある。そのモチは、杵と臼で搗くモチもあれば、モチ米を石臼などで粉にしたのを用いた、正確にはモチ性食品の「モチ」も



写真28 舞錐も使われている。[雲南省大理
ペー族自治州大理市鳳儀・ペー族]

ある。そして、後者のほうがますます多くなっているし、モチもモチ性食品も、漢族間では単なる儀礼食になってきたのは、上のことを示唆することにはならないだろうか。

ところで、ペー族の饅頭投げに関する問題が、まだ残っている。

ペー族の生活文化は、高床式住居の分布のあったトン族その他の民族と共通するところもあるが、たとえば、モチ米利用はあっても、それはたいへん少なく、モチは儀礼食的に用いられていて、おこわは好まず、ウルチ米の飯のほうを好む。生に近い、ただ皮の表面をあぶるだけというブタ肉は好むが、ナレズシなどはない。茶道めいた「烤茶」を好むが、それには「乳扇」を入れたりする。「乳扇」は、スルメのような形の一種のチーズであり、牛乳から作られる。というように、儀礼、贈答にも用いるが、モチは日常的に用いられ、毎日毎食おこわを食べ、魚もブタもニワトリも、あるいはキュウリ、ナスであれ、各種のものをモチ米を用いて乳酸発酵させて、ナレズシを作り、「油茶」にはモチや、モチ米粉で作ったダンゴも入れるトン族とは、異なるところもあるのである。

モチ米のモチでなく、コムギ粉の饅頭を作り、それを棟上げ式に用いたのも、饅頭投げが、モチまきと形式を同じくする点で、共通の枠組みを想定できるとともに、他の文化要素がペー族の生活文化に入っているであろうことも想定される。「乳扇」は、「烤茶」に入れるとしても、それは大量に入れるわけではない。一般には、料理の材料として用いられる量のほうが多い。この乳加工文化のあること、モチ米のモチよりコムギ粉の饅頭というのも、その生活文化に、牧畜もしくは有畜文化の影響があるということになるのである。

すでに見た高床式住居の分布地域は、今日のそれも、遺跡による過去のそれも、いわば照葉樹林文化帯とはば

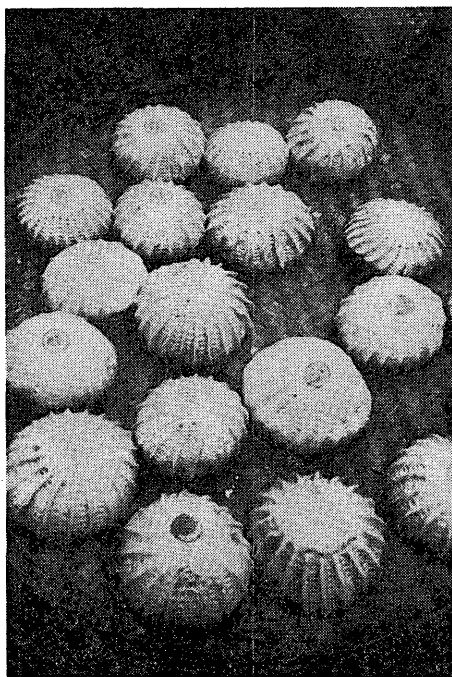


写真29 ソフトボール大の棟上げ式でまく饅頭。コムギ粉製。[雲南省大理ペー族自治州大理市紅山・ペー族]

一致する。ペー族の分布地域には、今日高床式住居はないけれども、ペー族もしくはその祖先が、かつてはそれを持っていたと、前章の「雲南劍川海門口」遺跡のところで触れたことを思い出したい。大理ペー族自治州あたりは、マツの二次林が目立ち、照葉樹林の優占はもはやない。それは、他の少数民族の地域でも、ほぼ似たところがある。しかし、大理の北方、麗江ナシ族自治县あたりでも、かつては照葉樹林帯に含まれていた。今でも、ほんのわずかだが、その痕跡を残す照葉樹があった【中尾 1984】、【梅棹・中尾 1985】。第一、マツの二次林は、その照葉樹の乱伐による出現なのであった。

というわけで、ペー族の場合は（ナシ族もその可能性があるが）、照葉樹林文化と牧畜もしくは有畜文化の混合する文化を持ち、照葉樹林文化からいえば、そのマージナルな部分になるといえようか。あえていえば、そのすばらしい木造住居部分の技術は、照葉樹林の高床式住居の技術と通根しているともいえる。

以上において、高床式住居と非高床であるが、高床式住居と関連ぶかいと見なせる住居とについての、建築儀礼をめぐる検討を加えたが、記述は現今の建築儀礼そのものを目的としたわけではないので、現有資料のすべてを羅列せず、その一部のみを述べることにした。目的とするのは、むしろ現今の建築儀礼でなく、高床式住居ならば、なんらかの共通する原初的建築儀礼があったのではなかろうか、ということの探索なのである。

現今のものでは、たとえば、タイ族とトン族とでは、同じ高床式住居であっても、その建築儀礼は相互に異なる。しかし、その古い時代の原初的建築儀礼には、何か共通するものがあるのではないかと、探索したかったのである。もちろん、現状では、まだ何もつかめていない。しかし、糸口のようなものでも発見したいということで、本章を述べた次第なのである。

最後に、日本の建築儀礼についても、簡単にコメントしておくことにする。

今日の日本の建築儀礼は、かなり簡略化されているのは断わるまでもない。特に、都市においては、その傾向が著しい。しかし、それでも棟上げ式において、柱や梁を重視する諸行事が残存している。モチまきは、田舎でならまだ残っている場合もあるようだが、すでに都市ではほとんど見ることがない。しかし、多くの建築儀礼を記した資料【伊藤 1959】、【鹿島出版会（編） 1973】、【山崎 1979】には、モチまきを含めての伝統的建築儀礼の記載がある。都市で行なうものでも、神主がとりしきるのが通常の状況である。それは、きわめて日本的な、建築儀礼を形成する要素になっている。

しかし、たとえば、前記の大工の唱えることばにあった「紫微星」に通じる「紫微

宮」とか、「紫微正照」を赤紙に書いたりする例は、中国各地でしばしば見られたが、その種の道教的要素が出現するのも、沖縄に例がある。その場合は、棟札に「紫微鑾駕」とか「天宮賜福紫微鑾駕」と墨書し、裏に「霜柱氷軒雪桁雨棟露の葺草」とか「福如東海広」を書いたものを、棟木に釘で打ちつけるか、棟札を作らず、棟木そのものに「紫微鑾駕」などを書く場合もあるという[又吉 1984]、[窪 1971]。

この種のものは、日本津々浦々にあるわけではなく、華南の文化と親近性のある沖縄でこそその現象だといえよう。

赤紙をべたべた貼る例は、寡聞にして知らない。したがって、これは検討を要しない。

そこで、結論的にいえるのは、日本の場合にも高床式住居の系譜をたどれる伝統民家の建築儀礼が、高床式住居の原初的建築儀礼と思われるものと、共通するところが基底にあって、その上に神道的要素が付加されたが、沖縄の場合は、さらに道教的要素も付加されたのであるということである。

ただ、道教的なものは、かなりあとで、華南あたりから伝わったものにちがいがなく、原初的高床式住居の建築儀礼の伝播とは、切り離さねばならない。

もちろん、原初的高床式住居の建築儀礼の伝播は、確定されたものではなく、その実体も先に述べたように明らかでなく、その探索は今後の問題として残されているのである。

V. ま と め

高床式住居の分布する地域には、伝統的社会が生きており、そこには、伝統的物質文化がなお存在している。そして、古法というか、古来の種々の技術がなお継承されている。

たとえば、トン族を例にして述べるとすれば、それぞれのトン族の村で、たいてい見ることのできる「鼓楼」が、その伝統的社会的象徴になるだろう¹²⁾。その物質文化に関していえば、筆者は、すでにモチ、チマキ、おこわ、ナレズシ¹³⁾、油茶などについ

12) 972頁に記載。

13) ナレズシは、かつては長江中下流域以南の漢族間でもあったことは、古い文献に記載があるのだが、今日では、スシといえば日本のものだ、日本人も、大多数の漢族もそう思いこんでいる。しかも、今日の日本のスシは、いわば「早ズシ」であって、それは新しい時代の産物にしかすぎず、その源流は、あの琵琶湖あたりにまだ残っている「フナズシ」のようなナレズシだったが、それを知る人も少ない。

という次第なので、トン族やミャオ族、あるいはタイ族などにもあるナレズシ、しかもナレ

て報告したことがある [周 1984b, 1985], [周・他 1985] ので, ここではその詳細については敷衍しないでおく。ただ, これらに追加してさらにいくつかの例を述べると, ミャオ族の古型の製紙技術¹⁴⁾とか, 真正の茶以外の「茶」の利用¹⁵⁾とか, センニンコクの種子の利用¹⁶⁾とか, 種々の例が思い浮かぶ。それこそ枚挙するのにいとまが

ズシといっても, 三江のトン族のように, 魚だけでなく, ニワトリ, ブタ, 各種野菜のそれがあり, ある地方のヤオ族は, もっぱら鳥のナレズシを作るなど, ナレズシ好みの風習も, 古法の残存を示す好例となるだろう。

- 14) 貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州丹寨県のミャオ族は, コウゾの樹皮を用いて, 和紙のような「白皮紙」を作るが, そのコウゾを川水につけ, 手でもんでから, 石灰水につけ, 次いでそれを軟化させることになるが, 軟化の熱処理は, 「紙甕」と称する甕が用いられている。おこわを蒸す甕の代用ではなく, 製紙専用の甕だが, 蒸す方法がここにもある。日本の流漉きで, トロアオイやノリウツギなどが, いわゆる「ネリ」として用いられているのと同様に, ここでは現地名「岩杉樹」の根, 「野綿花」の根, その他の植物が, 「滑葉」(ネリ)として用いられているのも興味ぶかい。この製紙法も, 古法を残すものという点で, 関係者の注目を浴びているのである [石橋大鏡箕寨民俗調査組(編) 1984]。

- 15) 茶の原産地は, 雲南省やアッサムのあたりだといわれている。一般には, 南米の「マテ茶」や, 中国の「菊花茶」や, 日本の「柿の葉茶」など, 種々の真正の茶(学名で *Thea sinensis* と称するもの)以外の「茶」を含めて, 茶と称しているが, 真正の茶が最も普及するようになる前は, 稲が多く雑穀中から特に選ばれ, 広がったように, 多くの異なる植物葉の茶の利用があった中から, 真正の茶が選択され, 特に普及したと思われる。それは, 茶の原産地と考えられている地域とその周辺には, 今日なお, 真正茶以外の植物葉が, 茶的利用されていることが多く, その点から, そのように推察されるのである。

広西チワン族自治区の大瑤山のある金秀ヤオ族自治県の「甜茶」もその例で, これは真正茶でなく, バラ科の *Rubus suavis* の葉を利用する。甘味があるので「甜茶」とその灌木をよび, 「茶」の名称にもなっているのである。ただし, 「甜茶」と称するものは, これ以外にもある。ブナ科の多穂稠 (*Lithocarpus litseifolia*), ブドウ科の藤茶 (*Ampelopsis cantoniensis*), トウダイグサ科の甜葉算盤子 (*Glochidion philippinense*), ユキノシタ科の土常山 (*Hydrangea aspera*) も, 「甜茶」と称して, 「茶」として利用する。なお, 土常山は, 甘茶ともいうが, 和名のアマチャと同じ発想で命名されている。これらの「茶」は, 広西だけでなく, 四川, 雲南, 貴州に産したり, もっと広域に長江以南の各省に分布したりするが, その利用は産地のすべてでなく, 西南中国と華南に集中しているのがおもしろい。

広西には, 「桑寄生」というヤドリギ科の *Loranthus parasiticus* も採集され, 古くから「茶」として利用されている。『本草綱目』にも出典があるほど, 利用は古くからあるのである。「桑寄生茶」と称している。

これらのものを, プータンの場合と比較するのは興味ぶかい。中尾佐助の資料 [中尾 1976], [中尾・西岡 1984] には, 別種のヤドリギが利用されているだけでなく, ヒマラヤのシャクナゲの「茶」利用とか, 中国の土常山と同種のアジサイのなかまのものも, 「茶」として利用していることが述べられている。

- 16) 中尾は, ヒユ科のセンニンコク (*Amaranthus caudatus*) が, 栽培され, あるいは作物中に混入しているが, その種子が穀類のように利用されるのは, ヒマラヤ地域だけでなく, 中国西南部でも同様であると述べている [中尾・西岡 1984]。

中国では, この「紅莧菜」とか「尾穗莧」と称されるセンニンコクだけでなく, シゲホビユ (*Amaranthus hybridus*) である「干穗穀」とか「繁穗莧」と称するほうも, 同じく種子を利用する。

中国における両者は, 小山鐵夫によれば [小山 1984], 東北地方から雲南省まで栽培しており, 野菜としての利用は, 前者より後者のほうが好まれているようだ, としている。しかし, 中国の植物学関係の文献では, 後者の種子利用については触れてあっても, その他の食用の記載はほとんどない。その理由は, この中南米原産の植物が, トウモロコシの伝来に伴って, 今もトウモロコシ畑などに随伴して生えてくるのが通常の姿であるが, その花穂の姿が美しい

ないので、例はこれ以上述べないことにするが、高床式住居の分布する地域には、それぞれの民族の伝統的社会があり、伝統文化があるのである。筆者は、伝統文化のうちの物質文化に重点をおいて、これまで調査してきたのであったが、物質文化の文化要素は、それぞれの民族、あるいは地域において、散発的に一、二のそれが共通して観察されるだけでは、充分人を納得させられない。もちろん、諸文化要素は、地方差がある場合もあり、どこでも一致する内容ではないのは、三江のトン族と新晃のトン族で、同じ「油茶」といえども、内容は完全に同じではないという例を挙げればよいだろう¹⁷⁾。ところが、諸文化要素は、それぞれ内容に小異はあっても、いくつかセットになって、それぞれの民族、地域に発見されるのである。

その文化要素のセットは、いわば照葉樹林文化の文化要素の複合だといってもよい。高床式住居の分布は、中国の一部に限られるわけではなく、東南アジアの大陸部や大陸部以外にも分布があり、オセアニアなどにも分布がある。それらのすべてが、同じ文化によって支えられているわけではないが、高床式住居は、安志敏が述べたように[安 1963]、必ずしも中国大陆を中心にして、各地に伝播していったわけではないし、かりに伝播したのだとしても、それを支えている文化に相違があってもよい。しかし、少なくとも、照葉樹林文化帯の高床式住居はその文化の一文化要素であり他の照葉樹林文化の文化要素と、多かれ少なかれセットになっているといえよう。そのセットになっている程度の強さが、個々の文化要素の存続を許している強さになっているのではなからうか。

高床式住居の存続の条件は、したがって、中国においては、照葉樹林文化の文化要素の複合に依存しているといえようか。もし、それぞれの価値の体系が、漢族文化によって、改変されるときは、一、二の文化要素だけが異なってくるのではなく、かなり総くずれの勢いで異なってくるものと思われる。

もちろん、漢族同様に地床式住居に変わった所もある。しかし、それもいきなり土壁を築く漢式の地床式住居になるのではなく、「穿闘式」のすばらしい木造の地床住居にその未練を残してはいないか。

高床をやめて、地床にしたのは、戴裔煊のいうように[戴 1948]、高床の床下に家

ので、観賞用植物として栽培されるのが普通であるからだ。つまり、一般には、食用植物としての重要性が認められていないから、その記載も乏しいということになるのである。

だが、これの種子利用は、貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州のミャオ族では、珍しくはない。ミャオ族は、その畑で栽培されたのを「薺米菜」などとよんでいるが、「薺」は、手で草などを抜いたり、むしったりすることをいい、「米」は、コメとは限らず、穀物の子実をいう。区別するときは、コメは「大米」、アワは「小米」というふうにいる、あの「米」である。「薺米菜」という地方名は、したがって、なかなか当を得た命名法になっているといえようか。

17) 971頁の注11) 参照。

畜を飼育することによる不衛生さを、漢族の住居のように、他に畜舎を設けることで、衛生的にしたためというのは、そういうことの可能性も、例としてはいささか存在することがあったとしても、それは、全局を左右する原因ではないと思われる。

高床式住居の存続する条件は、伝統的社会もしくは文化の存否に左右されるものであり、高床式住居は、伝統的社会もしくは文化の存在の現われの一つであろう。

本稿は、筆者の調査資料と現有の文献資料に基づいて、中国の高床式住居の地域的分布、および、高床式住居を持つ民族を明らかにしようとしたものである。同一民族であっても、地方差があり、一部で高床式住居があっても、他の一部でない場合もあった。地域によって異なる有無の状況は、それぞれ具体的に言及したつもりである。

高床式住居に関する建築儀礼も、民族によって、地方によって異なる場合があった。たとえば、タイ族とトン族をとりあげると、そのちがいはたいへん大きい。本稿は、その種々の儀礼のありさまを、儀礼そのものに重点をおいて記載するのを目的とせず、相互に今日では異なるところのある儀礼であっても、原初的なものはどんなものであったのかを探索しようとした。その探索は、糸口というほどのものを、かすかにつか



写真30 馬胖の鼓楼。〔広西チワン族自治区三江トン族自治県八江公社・トン族〕

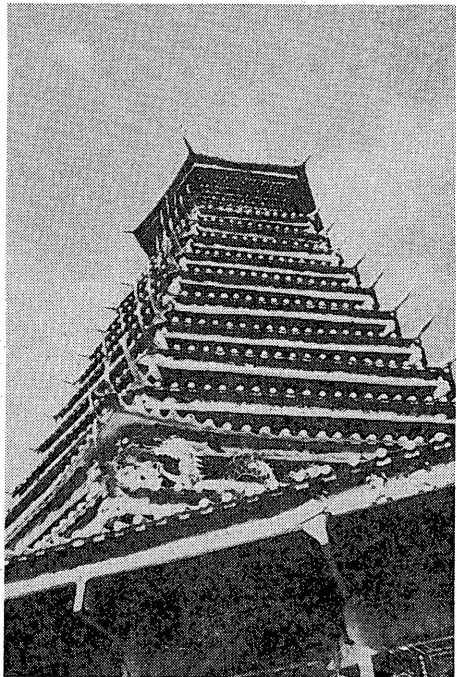


写真31 高増の鼓楼。〔貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州從江県高増寨・トン族〕

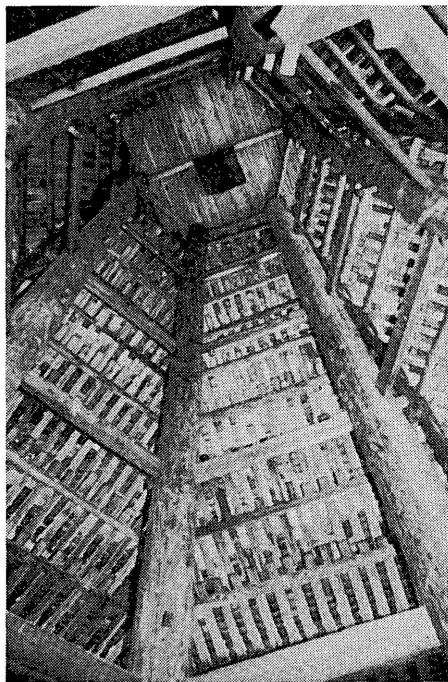


写真32 「31」と同じ（内部から屋上裏を見たところ）。

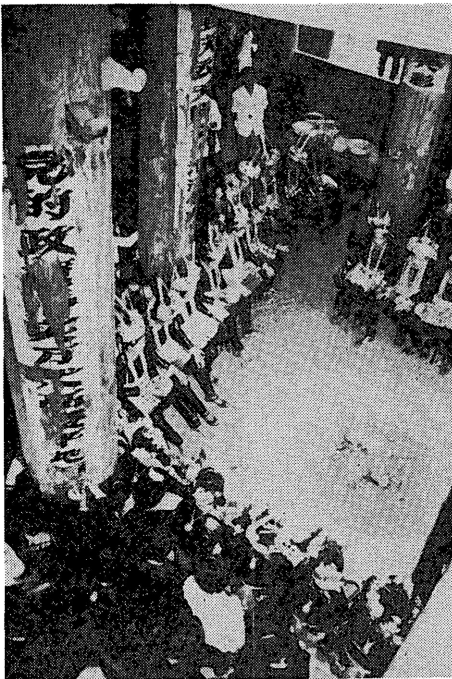


写真33 高増の鼓楼でイロリを囲んで歌う人々。[貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州從江県高増寨・トン族]

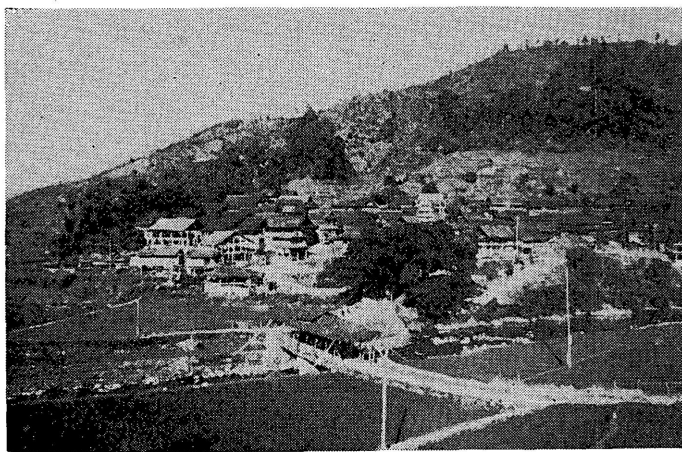


写真34 素朴な鼓楼（中央やや右寄り）と素朴な風雨橋のあるトン族の村。
[貴州省黔东南ミャオ族トン族自治州從江県良寨・トン族]



写真35 油茶を作っているトン族の娘。[広西チワン族自治区三江トン族自治県良口公社・トン族]



写真36 トン族の宴会料理。ナレズンづくし、酸菜（酸湯をだしにした料理）づくしの料理である。[広西チワン族自治区三江トン族自治県林溪公社・トン族]

んだ程度で、まだ探索されたとはいいいがたい。そのため、IV章は、「儀礼をめぐる」という題にしたのである。

また、高床式住居の存続に関する条件は、照葉樹林文化に、少なくとも中国の場合ではかわりがあるだろうと、このまとめの章で述べた。

11)「油茶」は、植物の名称であり、食用油の名称であり、茶の名称であるので混乱しないよう、気を付けねばならない。植物名の油茶は、学名が、*Camellia oleifera* である普通油茶と、同じく *Camellia meocarpa* である小葉油茶と、その他の油茶の総称である。地方名は、果油茶とか、茶油樹とか、いろいろだ。食用油の油茶は、その植物の実をとり、種子と殻にわけ、種子を搾油して得られる。この食用油を用いて作る茶が、飲む油茶である。

その飲む油茶の作り方は、まず鉄鍋で茶葉を炒め、水を加えて煮てから、塩もしくは砂糖を入れる。次いで、「すいのう」のような竹で編んだ杓子の「ルウ・シェー」で、油と茶液を濾過する。茶葉は、その杓子に残ることになるが、その濾過液を飲むことになる。ただし、濾過液だけの「淡油茶」を飲むのは、貧困な場合だけで、通常は飲まない。通常は、いろんな具を作っておき、それを入れた油茶なのである。最も普通であるのは、モチ米のあられである「米花」ときざみネギが入るもの。客をもてなしたりするほうは、もっといろんなものを入れる。搗いたモチの薄切り、モチ粉で作ったダンゴ、クリ、ピーナッツ、大豆、ブタ肉、ブタの肝などである。これらの具をあらかじめ用意しておき、濾過液が得られると、碗に、具の中からいくつかを選んだのを入れ、濾過液をそそぎ、それを出すのである。1杯目がすすむと、碗に

また具の中から数種をとって入れ、濾過液をまたそそぐ。2杯目が終わると、3杯目に移る。このように数回飲むのを「一輪」、「二輪」というように数える。「起碼要吃三輪、最後一輪要吃甜的」と称して、最低は3杯、最後の1杯は甘いのをいただくのが普通である。このようにして茶を飲むのが「打油茶」なのである。

「打油茶」に用いた茶葉は、殺青で蒸青法を用いる緑茶である。この点は、注目に値する。というのは、古くは中国の茶も蒸青によっていたため、茶が日本に伝来したあと、日本では今日まで、ほとんど蒸青によっており、炒青によるのはごくわずかであるのに対して、中国では、明代から蒸青による方法が炒青によるものにとって代われ、今日では、蒸青法は本家の中国ではもう消滅したと思われていたからである。トン族の茶が、蒸青法で殺青するのは、したがって、注目に値することになるのである。

しかし、それは、漢族世界の茶にしか注意していなかった日本の茶に関する学界、あるいは漢族の茶関係者が、茶の殺青法が明代から炒青法に変わったと思っていたにすぎない。

広西チワン族自治区三江トン族自治県のトン族の油茶が、蒸青法による殺青の茶を用いていたのは、明代以前からの方法が今日まで延々と用いられていたことを語る。確かに、今日の中国の殺青法は、炒青がほとんどである。そういう全体の状況の中で、トン族は昔ながらの蒸青法を用いていたのである。

油茶にもどって述べるが、油茶でもう一つ注目に値するのは、結婚式などの人々の多く集まるときは、茶葉をあらかじめ粉末にしたのを「打油茶」に用いるということ。数10年前までは、日常でもこの粉末のほうを用いたという。これは、一種の「抹茶法」ではなかろうか。日本でも、明代になると、抹茶法が中国では煎茶法にとって代われ、抹茶法は消滅したと思われていた。その抹茶法のいかにも原初的形態を残すものが、三江トン族自治県にあったのだ。したがって、これも古法を残しているといえようか。

もちろん、油茶を飲用するのは、三江トン族自治県では、トン族のみならず、そこに住むヤオ族、ミャオ族にもあるが、貴州省の榕江県とか從江県のように、トン族居住地でありながら、「酸湯」とかナレズシはあっても、油茶を飲むのが欠落している場合があり、湖南省の新晃トン族自治県では、油茶はあっても、茶葉を炒めて水を加えた鍋に、そのままジャガイモ、トウモロコシ、塩などを入れ、濾過せずに碗に入れ、「米花」をたっぷり入れて「飲む」という、異なる形式の油茶もある。ちなみに、「酸湯」は、イロリのそばに常備している、モチ米をといだ水を入れる容器の中で、やや酸味のするとき汁発酵液のことで、これが種々の料理を作るときのダシになる。

- 12) 鼓楼そのものについての詳しい情報は、1985年の貴州省内における調査で、12日間行動をとりにしたトン族の黄才貴の論文「侗寨鼓楼研究」にあるが、この論文は、その他の人々の鼓楼に関する論文とともに、1冊にまとめられ、黄才貴の論文名が、そのままその本の題名にも用いられている[貴州省文管会弁公室・他 1985a]。

ここで目的とするのは、鼓楼の建築学的特徴についてではないので、その詳細は省くが、ごく簡単な説明だけをしておかねばならない。

以下は、その『侗寨鼓楼研究』を参考にしながら、調査によって得られた資料も駆使して、簡単に述べていくので、いちいちこの本の引用部を明確にできかねることを、あらかじめ断っておく。

鼓楼の名称は、その建物に皮太鼓を置いているのに由来する。木造家屋は、火災を起こすと、類焼しやすい。もし、ある村に火災が起り、その村の鼓楼も焼失すると、人々は先に住居のほうを復興させようとするのでなく、鼓楼を復興させようとする。ただ、それはあくまでも象徴的であって、焼跡に1本のコウヨウザンの木を立てるとよいのである。鼓楼そのものが完成されなくても、この木が心目中的「鼓楼」になる。

このことは、トン族の村人たちが、鼓楼をいかに重視しているかがよくわかる話になる。

この鼓楼だが、一般には、トン族の村に最低一つはあり、現存するものでは、五つもある村もある(八つあった所のは、焼失して現存しないという)。

ところで、各種の画報のグラビア写真にしばしば登場するのは、数層の塔のように見えるものばかりなので、そのようなタイプのものばかりであるように思われるが、実際は、異なるタイプのものがあるのである。その名称だけを記すと、それらは「干欄式鼓楼」、「楼閣式鼓楼」、「密檐式鼓楼」、「門閣式鼓楼」、「民居式鼓楼」などである。

このうちの「干欄式鼓樓」は、高床式住居と同じように、高床の鼓樓であることは、記憶しておかねばならない。広西チワン族自治区の竜勝族自治県では、竜坪寨、平等寨の呉家と、徐家、三江トン族自治県では、大田寨、湖南省通道トン族自治県では、馬田寨、貴州省榕江県では、晚寨にあるという。そのうちのあるものは、高床の下が人道になっているようだ。その場合は、高床の床で、後述の諸活動が行なわれる。

楼閣式のは少なく、最も多く現存するのは、密檐式で、筆者の訪れた最も美しいとされている三江トン族自治県の馬胖鼓樓や、貴州省従江県高増寨の鼓樓も、このタイプのものであったし、グラビアでよく見るのも、このタイプのものである。

門闕式のは省き、民居式というのを説明すると、この「民居」は、高床式の民家を指しておらず、ここでは高床のでない地床式の民家のほうを指している。一般には「穿闕式」であるが、中には「臺梁式」の長所を一部にとり入れたものもある。

これら諸タイプの鼓樓のうち、高床式のは、最も早期からあったタイプで、高床式住居を雛型にして作られたと推察されているが、それは当然のことだといえるだろう。

鼓樓の外観は、素朴、絢爛豪華の別はあっても、数層の塔のように見える。しかし、その内部に入り、頭上を見上げると、がらんどろになっていて、数階になっているのではないことがわかる。構造の詳細は述べないが、最も多いのは、4本の太柱（「主承柱」）が地面から屋根裏に達するもので、その4本の柱を結ぶ横材の各種とともに、筒形の内柱環を作っており、それをとりまく形で軒柱があるが、その数は一般には12本で、これらで外柱環を形成している（内柱で6本か8本、外柱で8本、14本、16本のものもある）。柱数は、内、外とも偶数で、それによって作られている平面も、4角形、6角形、8角形と偶数の角であるが、層数は、3層、5層、7層……と、奇数で、15層のものもある。太鼓は、屋根裏にとり付けたのが最も多いが、前記馬胖の場合は、第3層にとり付ける工夫がされている。釘1本使わないすぐれた建築物である。

ところで、この鼓樓の村内における役割は何かといえば、火災時などの緊急を知らせる太鼓を鳴らすだけなのではない。それ以外に、村の長がそこに集まって議事を行なう。村民間のもめごとをそこで処理する。男女が集まって歌のかけ合いをする。鼓樓の広場（「鼓樓坪」）で、歌い、踊りをし、芦笙のコンクールをする。闘牛用の牛が死んだとき、その角を柱上にかける（村民の団結と村の富のしるしという）。通過者の便宜をはかってワラジなどを常備しておく。村民の休憩の場である。

筆者は、広西の三江トン族自治県林溪人民公社程陽の亮寨の素朴な鼓樓で、その近郊の大田寨、新寨、岩寨などから、日が落ちてから長短まちまちの芦笙に、種々の植物の枝葉をその上に付けて、やってきた芦笙隊のコンクールが、深夜まで行なわれたのを見る機会があったが、亮寨の子どもを含めてほぼ全員がそこに集まっているほどの、村をあげての行事になっていた。このコンクールは、時期を異にして各村で行なうという。鼓樓は、そのように、村民の集合の中心地なのである。

貴州省従江県高増寨を訪問したときは、青年男女が鼓樓に集まり、鼓樓内の地面に作られたイロリを囲んで、歌をうたって歓迎してくれた。外来の客を迎えるのも、鼓樓がその場所になっている。もっとも、鼓樓に案内される前には、その近くの広場で人々が待ちうけており、「攔路歌」が歌われ、酒を飲まないことには、外来者を村へ入れないことになっている。「攔路」とは、とおせんぼうのことで、道をふさぎ、通行をじゃますることである。

しかしながら、上記鼓樓の諸機能は、識者が頭で考えた場合にまとめられるものであった。なんのために鼓樓が村に存在するのかを村人に問うと、異なる答えが返ってくるという【潘1985】。

それは、「鼓樓は民族の団結を象徴するものだ」という類のもので、この種のものが最も普遍的回答になるという。「われわれトン族は、魚が魚溜に集まるように、鼓樓に集まるのだ」というのもそれだ。ちなみに、トン族の村には、稻田養魚が行なわれており、魚溜とは、水田中でやや深くなっている、魚の集合できる所で、その上には、しばしば柴が数10本からめられて、テントのように立てかけられており、魚に害を与える鳥などを防ぐようになっている。

いずれにしろ、鼓樓をトン族の象徴とするのは、トン族共通の心情によっていると、この人は説明するのである。

鼓樓は、確かにその村で最も目立つだろう。それは、トン族の今日なお活きている伝統社会、伝統文化の象徴であると換言してもよさそうだ。

付 記

- (1) 本稿では、敬称をすべて略させていただいた。
- (2) 本稿は、国立民族学博物館の「中国少数民族に関する基礎的研究」共同研究会（代表：周達生）で発表したものを材料の一部としているので、その研究会の個人成果の一つとしてここに発表した。
- (3) 本稿提出後の1986年12月、雲南省徳宏タイ族チンポー族自治州のすべての市と県、および、貴州省織金県などを調査してきたが、新資料をここに補充する余地がないので、それらについては、別の機会に発表させていただく予定である。また、最近、雲南省設計院雲南民居編写組（編）『雲南民居』中国建築工業出版社（1986年）を入手したが、それは、一部グラビア写真のタイ族住居が、徳宏なのであるのに、西双版纳のそれと誤記されている欠点はあっても、高床式住居に関しては、現今の中国における文献中、最も詳細なものであったが、これについての引用も、同上理由でさしひかえた。

謝 辞

本稿に関連した一部調査は、財団法人「サントリー文化財団」の「中国地方文化の研究——多様性と統一性」、および「フィールド・ワークに基づく中国諸民族の生活文化の研究」に対する研究助成金の御協力を得て行なった。記して厚く御礼申しあげる。

文 献

[著者名のアルファベットは、筆者以外の中国人名は中国の漢語拼音記号のアルファベットによった。それ以外のたとえば中国科学院自然科学史研究所などは、日本人名と同じアルファベットによった。]

- 安 春 陽・劉 伯 華（編）
1984 『ダイ族のむらざと——雲南省シーサンパンナ——』外文出版社。
- 安 志 敏
1963 「干闥」式建築的考古研究『考古学報』2: 65-85。
- 浅川滋男
1985 「海南島三亜・リー族漁民の二棟型住宅」『群居』10: 44-50。
- 曹 成 章・張 元 慶
1984 『傣族』民族出版社。
- 中国科学院自然科学史研究所（編）
1985 『中国古代建築技術史』科学出版社。
- 中国建築史編写組（編）
1982 『中国建築史』中国建築工業出版社。
- 中国少数民族地区画集叢刊総編集委員会（編）
1985 『貴州』民族出版社。
- 戴 裔 煊
1948 『干闥——西南中国原始住宅の研究——』嶺南大学西南社会経済研究所。
- 鄧 焱
1981 「苗侗山寨考査」『建築師』9: 161-168。
- 芳 莹
1982 「賀新房——雲南傣族風俗拾零——」『民間文学論壇』1: 72-75。

布朗族簡史編写組（編）

1984 『布朗族簡史』雲南人民出版社。

藤島玄治郎

1942 『支那の風土と建築』日本放送出版協会。

哈尼族簡史編写組（編）

1985 『哈尼族簡史』雲南人民出版社。

祐巴勐

1981 『論傣族詩歌』岩温扁訳，中国民間文学出版社。

胡仲実

1982 『壮族文学概論』広西人民出版社。

伊東忠太

1982a 『伊東忠太著作集 第3巻 東洋建築の研究・上』原書房。

1982b 『伊東忠太著作集 第5巻 見学・紀行』原書房。

伊藤平左エ門

1959 『建築の儀式』彰国社。

岩田慶治

1962 「東南アジアにおける居住様式の地理学」『人文研究』13(11): 36-52。

1985 『東南アジアのこころ——伝統文化の世界観——』日本放送出版協会。

賈唯英

1985 「吊脚楼上的歌手——土家族聚居区見聞——」『人民日報』（海外版）12月30日。

簡家奎・呉正光

1985 「丹寨石橋大簸箕寨的苗族民居」『貴州文物』1: 55-56。

江道元

1981 「彝族民居」『建築学報』11: 59-64。

1982 「西藏卡若文化的居住建築」『西藏研究』3: 103-126。

1983 『中国民族建築学』提綱・摘要・序」（原稿コピー）

江応樑

1983 『傣族史』四川民族出版社。

城步苗族自治县概况編写組（編）

1984 『城步苗族自治县概况』湖南人民出版社。

広東省民族研究所広東少数民族編写組（編）

1982 『広東少数民族』広東人民出版社。

鹿島出版会（編）

1973 『建築の儀式と祭典——起工式から落成披露まで——』鹿島出版会。

景頗族簡史編写組（編）

1983 『景頗族簡史』雲南人民出版社。

貴州省文管会弁公室・貴州省文化出版庁文物処（編）

1985a 『侗寨鼓楼研究』貴州人民出版社。

1985b 『貴州侗寨鼓楼風雨橋』貴州人民出版社。

国家民委民族問題五種叢書編集委員会中国少数民族編写組（編）

1981 『中国少数民族』人民出版社。

江華瑶族自治县概况編写組（編）

1985 『江華瑶族自治县概况』湖南人民出版社。

広西壮族自治区概况編写組（編）

1985 『広西壮族自治区概况』広西民族出版社。

小山鐵夫

1984 『資源植物学』講談社。

窪徳忠

1971 『沖縄の習俗と信仰——中国との比較研究——』東京大学東洋文化研究所。

LEHMANN, J.

1904 Die pfahlbauten der Gegenwart. *Mitteilungen der Anthropologischen Gesellschaft in Wien*, XXXIV, pp. 19-54.

Li Sen

1983 Back Home in a Bai Village. *China Reconstructs* 11: 62-64.

李 先 達

1983 「貴州の干欄式苗居」『建築学報』11: 33-36。

林 蔚 文

1985 「古代東南越人建築業述略」『中南民族学院学报』4: 90-95, 31。

劉 敦 楨

1976 『中国の住宅』田中 淡・沢谷昭次訳, 鹿島出版会。

劉 敦 楨 (編)

1980 『中国古代建築史』中国建築工業出版社。

劉 輝 荃

1983(?) 『海南島黎族の住宅建築』広東省民族研究所。

又吉真三

1984 「沖縄の建築儀礼行事」『九州・沖縄地方の住い習俗』明玄書房, pp. 309-318。

民族問題五種叢書雲南省編集委員会 (編)

1983a 『佤族社会歴史調査 (一)』雲南人民出版社。

1983b 『佤族社会歴史調査 (二)』雲南人民出版社。

1983c 『佤族社会歴史調査 (三)』雲南人民出版社。

1983d 『白族社会歴史調査』雲南人民出版社。

中尾佐助

1976 『栽培植物の世界』中央公論社。

1978 『現代文明ふたつの源流——照葉樹林文化硬葉樹林文化——』朝日新聞社。

1979 「照葉樹林文化の建築」『建築雑誌』94(1145): 11-14。

1984 「消えゆく照葉樹林帯——中国・雲南省を旅して——」『朝日新聞』(夕刊) 10月27日。

中尾佐助・西岡京治

1984 『プータンの花』朝日新聞社。

大島襄二

1973 「パラワン山地民の樹上共同家屋」吉阪隆正 (他) 『住まいの原型 II』鹿島出版会, pp. 83-97。

太田邦夫

1983 「世界の木造構法の分布とその技術史的背景」『住宅建築研究所報』pp. 3-24。

1984 「東南アジアのすまい——その形態と技術の伝統——」杉本尚次編 『日本のすまいの源流——日本基層文化の探究——』文化出版局, pp. 165-190。

潘 年 英

1985 「侗族人民的空間語言——論鼓楼的社会功能和美学意義——」『貴州社会科学』5: 17-19。

彭 壤 図

1985 「粑々情」『民族文化』1: 6-7。

傈僳族簡史編写組 (編)

1983 『傈僳族簡史』雲南人民出版社。

浙江省文物管理委員会・浙江省博物館

1978 「河姆渡遺址第一期発掘報告」『考古学報』1: 39-94。

浙江省文管会・浙江省博物館

1976 「河姆渡発現原始社会重要遺址」『文物』8: 6-15。

邵 俊 儀

1981 「重慶“吊脚楼”民居」『建築師』9: 143-149。

石橋大簾箕寨民俗調査組 (編)

1984 『貴州省文物工作資料匯編 (第五集) 丹寨県石橋大簾箕寨民俗調査報告』貴州省文物管理委員会・貴州省文化出版庁。

史 宗 竜

1982 「傣族古歌謡与傣族原始宗教」『思想戦線』6: 46-51。

周 中国の高床式住居

周 達 生

- 1982 「客家文化考——衣・食・住・山歌を中心に——」『国立民族学博物館研究報告』7(1): 58-138。
1983 「中国雲南・広西に行く——民博少数民族文化考察団報告——（6）建築と儀礼」『朝日新聞』（夕刊）1月21日。
1984a 「巨視的にみた中国の民家」杉本尚次編『日本のすまいの源流——日本基層文化の探究——』文化出版局, pp. 371-381。
1984b 「モチ米の利用——少数民族にみるネチネチ食品のあれこれ——」佐々木高明編著『雲南の照葉樹のもとで——国立民族学博物館中国西南部少数民族文化学術調査団報告——』日本放送出版協会, pp. 93-129。
1985 「<食べる>茶とその周辺」石毛直道編『論集・東アジアの食事文化』pp. 317-342。

周 達 生・鄭 大 聲・中尾佐助

- 1985 『アジアの食文化』大阪書籍。

新晃侗族自治県概況編写組（編）

- 1985 『新晃侗族自治県概況』湖南人民出版社。

四川省民族研究所（編）

- 1982 『四川少数民族』四川民族出版社。

思想戦線編集部（編）

- 1981 『西南少数民族風俗志』中国民間文艺出版社。

宋 兆 麟

- 1964 「雲南永寧納西族的住俗——兼談仰韶文化大房子的用途——」『考古』8: 409-413。

SPENCER, J. E.

- 1947 The Houses of The Chinese. *Geographical Review* XXXVII: 254-273.

スチューベル, H.

- 1943 『海南島民族誌』清水三男訳, 畝傍書房。

杉本尚次

- 1971 「東南アジアの住居——分布を中心として——」『季刊人類学』2(3): 147-191。
1977 『地域と民家——日本とその周辺——』明玄書房。
1984 「オセアニアのすまい——分布を中心として——」杉本尚次編『日本のすまいの源流——日本基層文化の探究——』文化出版局, pp. 229-255。
1985 「家屋」大林太良編『東南アジア・オセアニアにおける文化クラスターの構成と分析』国立民族学博物館大林研究室, pp. 54-59。

孫 以 泰

- 1963 「広西僮族麻欄建築簡介」『建築学報』1: 9-11。

譚 明 華

- 1984 「鄂西土家吊脚楼」『民族文化』6: 59。

田邊繁治

- 1970 「東南アジアの住居形成」『Energy』7(3): 30-31。

田中 淡

- 1980 「先秦時代宮室建築序説」『東方学報』（京都）52: 123-197。
1981 「干闥式建築の伝統——中国古代建築史からみた日本——」『建築雑誌』96(1175): 23-24。
1983 「中国の伝統的木造建築」『建築雑誌』98(1214): 32-35。
1984 「中国住宅の類型」杉本尚次編『日本のすまいの源流——日本基層文化の探究——』文化出版局, pp. 343-370。

田 兵・黄 世 賢・羅 汎 河・陳 立 浩主編

- 1983 『布依族文学史』広西民族出版社。

田 継 周・羅 之 基

- 1985 『佤族』民族出版社。

田 茂 忠

- 1983 「土家族歌俗」『楚風』2: 37-39。

鳥越憲三郎

- 1982 『原弥生人の渡来』角川書店。

- 鳥居龍藏
1980 『中国の少数民族地帯をゆく』朝日新聞社。
- 梅棹忠夫・中尾佐助
1985 「雲南に照葉樹をたずねて」『月刊みんぱく』9(3): 2-7。
- 雲南省編集組(編)
1985 『独竜族社会歴史調査(二)』雲南民族出版社。
- 雲南省建築工程設計処少数民族建築調査組
1963 「雲南辺境上の傣族民居」『建築学報』11: 19-23。
- 雲南省建工庁設計院少数民族建築調査組
1963 「洱海之浜の白族民居」『建築学報』1: 5-8。
- 佤族簡史編写組(編)
1986 『佤族簡史』雲南教育出版社。
- 若林弘子
1983 「倭族の高床式住居」, 「高床式住居の構造」, 「人体寸法と建築」, 「穀倉から神殿へ」
鳥越憲三郎編『雲南からの道』講談社, pp. 82-142。
- 王明達
1986 「白族魯班伝説的民族特点——白族与漢族魯班伝説的比較——」『山茶』1: 88-92。
- 汪寧生
1985 『雲南滄源崖画的發現与研究』文物出版社。
- 烏丙安
1983 『民俗学叢話』上海文芸出版社。
1985 『中国民俗学』遼寧大学出版社。
- 席克定
1984 「貴州水族石板墓葬」『貴州文物』2: 53-62。
- 山崎正男
1979 『建築業祭事の常識』清文社。
- 楊鴻勳
1980 「河姆渡遺址木構水井鑒定及早期木構工藝考察」『科技史文集(第5輯)』上海科学技術出版社, pp. 63-70。
- 楊鴻勳
1984 「從巢居到宮室——漫話原始社会的居住建築——」『文物天地』2: 38-40。
- 楊利先
1986 「劍川白族風情拾趣」『山茶』3: 75-77。
- 楊盛竜
1982 「土家族建房上梁儀式」『民族文化』6: 59。
- 楊通山・蒙光朝・馮偉・鄭光松・周東培編
1983 『侗鄉風情錄』四川民族出版社。
- 禹平華・許再富・黃玉林
1982 「西双版纳民族用材研究」『熱帶植物研究論文報告集』雲南人民出版社, pp. 108-115。
1985 「西双版纳傣族傳統栽培植物的調查研究」『雲南植物研究』7(2): 169-186。
- 曾憲陽・彭邦青・彭匡・吳洪恩編
1985 『貴州』貴州美術出版社。
- 張紫晨
1985 『中国民俗与民俗学』浙江人民出版社。
- 趙銳明
1983 「奇異的白族豎房儀式」『大理文化』6: 75-77。
- 趙正之
1983 「中国古建築工程技術」『建築史論文集(第一輯)』清華大学出版社, pp. 10-33。
- 朱良文
1984 「麗江古城与納西族民居」『建築師』17: 109-121。
- 朱宝田
1982 「試論基諾族大房子」中国民族学研究会編『民族学研究3』民族出版社, pp. 138-149。
- 朱盛良
1984 「布依族的石頭村寨」『中国』7: 7-9。